

修猷館同窓会誌

2023

菁莪

令和 5 年 January/Seiga



表紙解説

今回の表紙を選んでいるときに目に留まったのがこの写真でした。グラウンドの人工芝が綺麗で、透けるような青空と夏らしい白い雲が印象的でした。まるで、修猷館の夏の運動会の熱気がコロナを吹き飛ばしてくれているようにも思えます。それ以上に私が気になったのは、大きく映る学ランを着た女性応援団の2人。私が学生時代を過ごした25年前には見られなかった光景で、新鮮に感じるとともに時代の流れが令和へと移っていることを趣深く感じました。実際のところ、生徒の割合も男性と女性がほぼ同数で、学年によっては女性が多い学年もあると聞きます。これからの未来は明るい、男女問わず、自分が信じること・やりたいことができる社会が修猷館のグラウンドにはありました。一枚の写真ですが、たくさんのメッセージが詰まった一枚だと感じます。フレーフレー！修猷！

修猷館同窓会誌

菁 莪



リンク先 URL

(<https://shuyukan-dosokai.com/seiga/>)

目次

御挨拶	津田純嗣	1
御挨拶	大竹恵	2
近畿修猷会代表世話人就任挨拶		
随想「伝統の継承と発展」		
芝居と歴史のあいだ	神田由築	5
忘れられたデザイナー	相原浩之	9
夢の中で生きる	中村弘峰	13
「投稿」		
安住正夫編『内容を主とした入試問題選集』（昭和14年）と		
伊藤康彦先輩のお話	安部規子	17
修猷魂と生くる	馬淵崇	20
「前福岡県知事 小川洋さんを偲ぶ会初盆会」報告	橋山義博	24
キャリアアセミナー		
G.O.猷会キャリアアセミナー	真子千里	26
資料館案内		
部活OB会		29
修猷美術T.O.K.Y.O展15回展を迎えて		34
花盛り同窓会		
同窓会総会報告 3年ぶりのリアル開催「G.O.G.O集友」	岩永知久	39
東京修猷会総会報告	吉田貞信	40
集いし修猷健人ー近畿修猷会総会報告ー	後藤健介	42
「支部だより」		
東京修猷会	原沢由美	44
近畿修猷会	後藤健介	45

宮崎修猷会	光田靖	45
中京修猷会	川野靖	46
大分修猷会	布村知丈	46
鹿児島修猷会	三好宣彰	47
東北修猷会	工藤砂織	47
中国四国修猷会	河野浩	48
北九州修猷会	高松雄太	48
長崎修猷会	宮下武彦	49
沖縄修猷会	山崎秀雄	50
「周年行事」		
三年ぶりの同窓会ーそして修猷への想いー	入江正徳	52
卒業55+2周年記念行事実施奮闘記	由良範泰	53
4649会修猷館入学50周年記念同窓会&修猷館見学ツアー		
『西九州を巡る旅』開催報告	緒方龍	57
「あがり！」なき「すゝろく」ー還暦記念同窓会		
佐伯拓史		59
学年一口連絡アンテナ		62
学校報告		66
同窓会の歩み		69
役員会・学年幹事会報告		70
令和3年度 同窓会収支決算書		73
令和4年度 同窓会収支予算書		74
令和3年度 同窓会会費入金状況		75
修猷館同窓会会則		77
令和3年度 一般財団法人修猷協会活動報告		78
修猷館同窓会役員名簿・各支部会長名簿		

御挨拶



同窓会会長

津田 純嗣

(昭和44年卒)

同窓生の皆さん、今日は。原稿を書いている今は令和4年の11月です。コロナの第八波到来と言われる中、経済を廻す方針のもと人流・物流が戻りつつあります。物価高・人手不足の状況にもかかわらず、九州の経済展望は上向きと日銀が短観で示しています。そんな中、5月の福岡での総会から始まり各支部での総会もほぼリアルで開催が進んでいます。各人の育った時代は様々でも修猷館で脈々と紡がれて来た伝統を経験してきたという絆は世代を縦に通じて強く維持されている様、幹事学年でひとくち深まる横の繋がりを見て、いまさらながら同窓会の役割を再認識させていただきました。皆さんも是非、各地区の同窓会の活動へ参加してみてください。

コロナ禍での高校生活となったものの、卒業して行く生徒は「自分たちは行事の中止・制限など挫折も味わったが、そこから立ち上がることも学べた素晴らしい修猷生活だった。」と頼もしく言っているように思います。生徒たちを育む場所としての修猷を維持・発展させることも貢献して行かなくてはと身が引き締まりました。

子供の教育では、私は令和6年春の小倉での小中一貫校の開校のサポートをしています。現在の画一的な教育を超えて、個性を伸ばす教育を目指しています。夏にサマースクールとしてプレ授業を行いました。開校に向けてさらにブラッシュアップを進めています。又、私が卒業した東京工業大学は東京医科歯科大学との統合の方針を10月に発表しました。医工連携をうたい文句に国の支援の増額を狙っているのかと、学長に皮肉りましたが、意外にも遠い将来を見ての人材教育の多様化の発想でした。結果が出るには時間がかかるが、工学者の知識を持った医学者・医学者の知識を持った工学者といった多彩な人間を育てるための器を準備するとの思いでした。確かに米国では理工学部で学位をへて医者に進むというのが一般的です。その結果か、医薬・治療法などの独創的な発明の量も米国で突出しているようです。東工大は大学院進学を前提とした六年間教育を基本としたカリキュラムへの変更も10年前に完了しています。

修猷館は明治18年に再興されたときは欧米に負けない国づくりを担う人物の輩出のため、すべて英語で授業を行う英語専修学校として金子堅太郎の提言を受けて黒田家の全面支援により始められました。欧米を学ぶことが日本の急務であった中、いち早く英語専修修猷館を立ち上げた訳ですが、視察に来た夏目漱石からその教育レベルの高さに感心したとの話が残っています。そして、明治22年に五年制の中学修猷館となり戦後まで60年間続きます。学制は六年間の尋常小学校、五年間の中学校、三年間の大学予科を経て大学本科三年のトータル17年でした。戦後の学制改革で6・3・3・4の16年となり、修猷館は新制高校となり五年から三年制に短縮となります。

今、修猷館が生徒たちにとって最善の育ちの場となり、多様な学びの場となり、多才な逸材を輩出する場所であり続けるために、何を守り、何を変えるべきかを虚心坦懐に考える時期となったと思えます。

近畿修猷会代表世話人就任挨拶



大竹 恵
(昭和51年卒)

2021年11月の近畿修猷会総会におきまして代表世話人に選出されました昭和51年卒の大竹恵でございます。

芦原前会長のもとで、2年間幹事長を務めさせていただいておりましたが、その経験を活かしながら近畿修猷会の活動のお世話をさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、近畿修猷会の最近の状況を報告させていただきます。

新組織体制への移行

1976年に設立された近畿修猷会は2021年に45周年を迎えました。

現在会員数1,000名を超え、春季・秋季のイベント、春季・秋季の新聞発行、毎年11月には総会を開催し、また当会の大きな特徴である10以上のクラブ活動を擁するなど修猷館同窓会の中でも有数な組織に成長いたしました。その過程では、強力なリーダーシップを発揮された諸先輩方の努力には感謝しか

ありません。

ただ、近年のDX化、価値観の多様化、パンデミックによる旧制度の改革等が進みビラミッド型組織から、ブロックチェーンに代表されるネットワーク化の組織への時代に合った改革、組織変更が求められるようになりました。

その動きを受けて、芦原前会長時代より、卓越したリーダーではなくごく一般の卒業生がチームを組んで運営するチーム世話人制を先行実施いたしました。この組織は「役員」というより、年度幹事（世話人）とともに会員の皆様が楽しく集うために奉仕する「世話人」（お世話係）として会を運営するものです。2021年11月の近畿修猷会総会におきまして、先行しておりました実態に合わせての組織、名称の変更を承認いただき新たに発足いたしました。（詳細につきましては末尾をご参照ください。）

コロナ禍での2年間の活動状況

2020年のガンガン会（平成元年卒）、2021年の卒猷会（平成2年卒）の皆さんが年度世話人を担当した2年間は、100年に1度ともいわれるコロナ禍に見舞われ、春秋イベントはすべて中止、総会もハイブリッドという過去にない形式で行うことを余儀なくされました。

ただ、その中でも近畿修猷会らしく新しいことにチャレンジして成し遂げたハイブリッド型総会などのノウハウの蓄積は大きな財産になりました。Zoomやビデオレターによりご挨拶を頂いたり、福岡の修猷館高校とリアルタイムにつなぎ、中継

放送を行うなど毎年進化した総会の演出が上げられると思います。

また、春秋の新聞に掲載したコロナ禍の中でどのような活動を行ったか、創意工夫を行ったかは将来への貴重な記録となることでしょう。

復活の2022年

2022年は讃猷会（平成3年卒）の皆さんが年度世話人となり、3年ぶりに春イベント、秋イベントを復活させることができました。

春イベントは5月21日に「落語家といくになにを探検クルーズ」として、37名の参加を得て大阪中心部を観光船でめぐるツアーを行い、落語家のお話を伺いながらお弁当とお酒を楽しむました。コロナ感染はまだ続いておりましたが、讃猷会の皆さんの企画力、感染対策により大成功となりました。

9月3日には秋イベントとして、「箕面公園散策と箕面温泉」を行いました。快晴の下、28名の参加を得て、箕面の滝を巡り箕面温泉で疲れをいやしました。

温泉の中で年度世話人の讃猷会の方から、「3年ぶりイベントで喜んでおられる先輩の顔を拝見し、また改めて同期讃猷会の皆と親しくなれ本当に良かった」との言葉を伺い、「修猷館は入学時と年度世話人年の2度おいしい」というある先輩の言葉を思い出し、納得しました。

11月5日には、これもまた3年ぶりに懇親会付の総会を復活することが、先日の第4回世話人会で決議されました。活動に

ついて詳しくは近畿修猷会HPをご覧ください。

DX化の先兵 でじたるしつとう会

中高年の会員でSNSをうまく使えない方も多いという現状があります。そこで10番目のクラブ活動を立ち上げ、SNS使用方法習得のお世話をする仕組みを作りました。手始めに、「初心者向けスマホ講座」を5月28日と6月4日に行いました。多数の受講生と、若手会員がチューターとなり、スマホの基礎やLINEの基本、Zoom、近畿修猷会の基幹システムであるしくみネットの基本講座を行いました。秋季にも2回開講する予定です。

2022年の方針

本原稿締切りが2022年10月というところから来期（2023年度）方針は未定ですので、2022年度の方針をご紹介します。

1. 新組織の定着による会運営の活性化

組織改革の定着化と、会の運営を活性化させることに注力します。自由闊達にアイデアを出し合って会員の皆様に喜んでいただけるイベントや総会を企画する。また、クラブ活動の一層の活性化を図りたいと思います。

2. ウイズコロナ時代のイベント、総会開催の新しい手法の確立
様々な行事のリアルとオンラインの共有がキーワードになります。

諸事情で参加できなかった多くの方に参加の道が開かれました。今後は、福岡や東京、あるいは海外の同窓生とオンライン

で結ぶことで今までにない多くの企画を考えていきたいと思います。

近畿修猷会は、新組織を立ち上げ、コロナからの復活を進めております。

どうか、皆様のご支援を引き続きよろしくお願いいたします。

新組織体制のご説明（芦原前会長より引用）

・組織のフラット化

一般的に同窓会組織は会長を中心としたヒエラルキー型組織が一般的です。

しかし本来同窓会組織は企業や官僚組織とは異なり、卒業生はすべて対等でありその組織はフラットであるべきであるとの理念のもと、「役員」を「世話人」へと変更しました。世話人のコンセプトは会員の「お世話係」であり権威や名誉ではありません。世話人会は同窓会の運営をお手伝いしようとの思いを持った方々の集合体とし、卒業年次や役割に上下関係はなく、自由闊達に議論して運営に当たります。

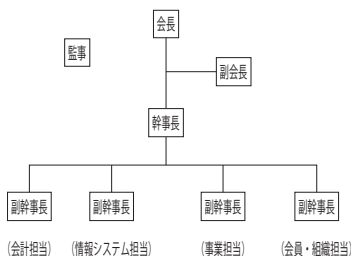
・チーム制の導入

必要に応じてチームを組織して運営するチーム制を導入しました。各世話人が培ってきた専門的能力や調整能力をチームの中で発揮していただきます。

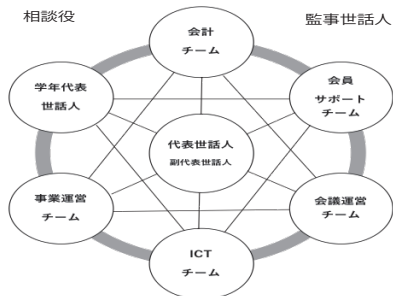
まとめ役として代表世話人やチームリーダーを置きますがそれは権威や名誉ではなく、一つの役割とします。

なお、代表世話人は原則として重任せず、2年間の任期で次の世代に交代することとしました。年度世話人と同様に常に世代交代することにより運営組織の活性化を図ります。

旧組織図



新組織図



随 想

「伝統の継承と発展」

芝居と歴史のあいだ



神 田 由 築

(昭和59年卒)

「芝居は世の中で不要なものとされた」——この三年間の感染症をめぐる議論のなかで私が気になった言説である。といっても、「芝居は不要か否か」をここで問いたいわけではない。「芝居は不要と（された）」という思考の由来が引かなかったのだ。個人的な感覚としては、この言葉は「芝居なんか不要だ」という文脈においてではなく、むしろ芝居にごく近い人たち——ジャンルを問わず俳優・スタッフから興行関係者、あるいは研究者までも——から発せられた印象がある。彼らは一様に「不要と（された）」ことに虚しさを訴え、自分の存在意義に悩みさえしていた。そうした場面に会った際に、「芝居が不要」などと考えたこともなかった私は、はじめは大いに驚き、やがて悔しいとも悲しいとも、なんともいえない気持ちになった。なぜ「芝居は不要と（された）」という思考になるのか。も

ちろん理由は一つではなく、感染症対策に対する考え方の違いもあいまって、いろいろあるだろう。だが私が注目したのは、公演中止という事態を当事者がそれほど深い悩みとして「内面化」させた要因はなにか、という点である。初めての緊急事態宣言が出されたとき、中止されたのは劇場公演だけではなかった。しかも、演劇の世界でもオンラインによる配信が盛んに行われた。劇場公演という「狭義の」芝居は中止されたが、けっして概念としての「芝居」の価値が否定されたわけではなかった。それなのに、なぜ——？

そこで思い当たったのが、これは「歴史」の記憶によるものではないかということだ。皆さんの中にも「江戸時代には芝居は厳しく弾圧された」と思っておられる方がいるかもしれない。それは、ある面では正しい。江戸時代の芝居興行には基本的に領主の許可が必要だった。実際に、興行が不許可になったり日数を減らされた事例は枚挙にいとまがない。また、地域によって実態はさまざまだが一般論として、役者は身分的な差別を受けることも多かった。十九世紀の天保改革では、江戸の芝居小屋が強制移転させられ人気役者が奢侈の罪をこうむるなど、各種の弾圧が加えられた。歴史的に芝居は差別されてきた——その潜在的な昏い記憶がコロナ禍によって呼び覚まされたことが、「芝居は不要なものとされた」「いつの時代も世の中から捨て置かれた」と思考する一つの背景になったのではないか。

だが、その「歴史」認識は、ごくごく一面にすぎない。たしかに戦時中など一部にはそういう時代もあったかもしれないが、

江戸時代では（そして現代でも）芝居と社会の関係は「不要か否か」と二項対立的に割り切れるような、そんなに単純なものではない。

私は大学で江戸時代の芝居と社会の関係について研究している。江戸時代は封建社会であると同時に、商品経済が飛躍的に発展をとげた時代でもある。諸藩の城下町、全国の門前町、港町、宿場町、鉱山町等々の町場は、政治的な拠点や交通・経済の要所として栄えた。そうした町場に「にぎわい」をもたらした商業を活性化させて領民の暮らしの安寧をはかるのも、領主の重要なつとめだった。その「にぎわい」のための人寄せの主役に据えられたのが芝居である。芝居小屋の周囲には、ちょうどお祭りの縁日のように、酒や菓子などを提供する飲食店や小間物（現代でいうグッズ販売も!）の店が立ち並んだ。芝居には興行収益だけではなく、領内の商人たちに貴重な稼ぎ場を提供し景気を浮揚させる経済効果も期待された。十八世紀に財政再建に臨んだ諸藩の中には、芝居興行を改革の一環として推進させたところも少なくない。誤解を恐れずに言えば、エンターテインメントを中心に据えた「観光立国」のような発想は、すでに江戸時代からあったのだ。

そう書くと、「江戸時代は平和だったから芝居も栄えたのだ」と言われそうだが、これまたそんなに単純な話ではない。「面白い江戸時代」もまた一面的な切り取りである。

江戸時代と現代とは決定的に違う点がある。江戸時代の領主にとって自分の支配領域を一步越えた先の他領は、現代的な

感覚で言えば、ほぼ「外国」に等しかった。領域を超えての人や物・金の流入にはリスクがつきものである。治安や風俗の悪化に加えて、もし収支バランスに失敗すればかえって領内経済の衰退を招く可能性があるなど、領内統治のうえでの難問にも直結した。領主は近隣「諸国」に目配りをしながら、いかに「自国」の秩序を維持して「外貨」を獲得するか、という競争に追われるようになった。

このような状況のもとで、「にぎわい」の要を握る芝居と社会との関係も、いよいよ複雑になってくる。たとえば一例として熊本藩（肥後）の事例を紹介しよう。

熊本藩には領内に本拠を構えるプロの役者集団が複数いた。そのほか、中津藩（豊前）や杵築藩（豊後）からも役者集団が巡演に來ていて、熊本藩では前者を「地役者（じやくしゃ）」、後者を「旅役者（たびやくしゃ）」と呼び、区別していた。かつて祭礼芝居が主流だったときには地役者で用が足りていたが、芝居の数が増えてくると旅役者を加えるようになる。その理由は「人手が足りないから」かと思つたら、史料には「地役者だけでは（人氣がなくて）見物人が少ないから」と書いてあった。足りないのは人手ではなく人氣だった。いつの時代も国内タレントよりも外国タレントの方がモテるんだな、と妙に納得した。藩の方でも、「せっかく経済効果を期待しての芝居であるのに見物人が少なくてはいかたがない」ということで、地役者の一座に旅役者が参加することを許可していた。そうなると当然のなりゆきとして、藩は禁止していたものの、やがて旅役者の

みの興行も行われるようになる、それが地役者の仕事と生活を圧迫する……という事態になって、ついに寛保二（一七四二）年、地役者の座本たちが藩に対して願書を提出する。現代なら「国内」産業の保護を求める業界団体からの陳情というところだろう。

ちよつと彼らの言い分を史料から（雰囲気を出すために熊本弁で？）聴いてみよう。

「国内での芝居にいつさい旅役者は雇わんよう仰せ付けてほしかです。そうすりゃウチらもがまだすし（頑張るし）……もつとも、ウチらだけでは不当たりやちゅうんなら、前々の通り、ウチらから直に（興行主を通さずに）旅役者は雇い、一座に加えて芝居は勤むることにしよごたる（勤めることにしたい）です」

なんとも歯切れが悪くて真意をはかるのが難しいが、「ウチらも頑張る……けど、ウチらだけでは不当たりだというのなら……」のあたりから、おそらく実際にレベルが高かったのだろう「外国タレント」に対する、拗ねとも嫉妬ともつかぬ「国内タレント」の赤裸々な心情が、リアルな感触で伝わってくる。地役者から見れば旅役者は、顧客（＝見物人）を取り合う対抗的な同業者他者だが、業界（＝芝居）全体のためには協業関係も結ぶという、これまた現代にもありそうな話である。あるいは藩に配慮して、いったんは出しかけた「旅役者をいっさい雇用して欲しくない」という本音を引つ込めて、ギリギリの妥協案を出したとも考えられる。

これより少し以前から藩においても、大勢の旅役者の流入が、

他国者の身分統制および風俗統制の観点から問題視され始めていた。他国者を入れると治安と風紀が乱れるというのは江戸時代の通念である。享保十三（一七二八）年には、旅役者を雇う場合、地役者を一芝居につき七人ほど加えるように（旅役者のみの一座は認めない）、また他国者を領内に長期間滞留させず興行後はすぐに領外に出すように、との命令が出されている。

さて、地役者の願書を受け取った熊本藩はどうしたか。重役たちの評議を聴いてみよう（武士は標準語で）。

「だいたい旅役者が大勢入り込み、もし不慮の事故があつては難しいことになるし、そのうえ風俗上もよくないので、今後は旅役者をいっさい加えず地役者だけで興行するよう命じるのがよいのではないか。そうすれば旅役者を雇う賃金等も国内の融通にまわすことができ、他所へ金銀を流出させることもない。いかがだろうか」

「しかし、この件は先年も検討して、旅役者を加えないよう命じたが、その後よんどころない願いがあつて、現在までは旅役者を加えてもよいことにしている。そこへまた、これ以後は旅役者は全面的に禁止する、というのはいかがなものかと思う。だから、地役者だけでは見物人が少なく（経済的な）助力にならないならば、地役者の願いの通り、地役者から直に旅役者を雇い一座に加えて興行するよう命じたらよいのではないか」

史料の原文訳をほぼそのまま載せたが、ああでもない、こうでもない葛藤する藩の重役たちの苦悩が克明に伝わってくる

のではないだろうか。個人的には「よんどころない願い」とは、どの筋からのどのような願いだったのが気になる：アヤシイ。

結局、二案のうち後者が選択されることになった。すでに藩の政策も何度も旅役者の禁止と容認の間で揺れ動いており、さすがにそうした一貫性のなさを自覚して今回は全面禁止には踏み切れなかったのだろう。地役者の要望通り、地役者が直に旅役者を雇い一座に加えることは許可するという、いかにもそれらしい妥協点で一応の決着をみる。

地役者をとるか旅役者をとるか、という選択は、領主支配の論理をとるか、超領域的な市場原理をとるかの選択に他ならない。領域支配にもとづく身分統制や風俗統制、あるいは治安維持、金銀の流出抑制を実現するには、地役者のみを用いるのがよい。だが興行収益を求めるなら、見物人が少ない地役者よりも、広範な芸能市場で鍛えられより大きな収益が期待できる旅役者がよい、ということになる。

これは、熊本藩のみで生じた問題ではない。ただし地役者と旅役者が併存する状況は熊本藩特有だったかもしれないが、しかし全国的にも、十八世紀半ばから後半にかけて、芝居がもたらす経済効果が注目されるようになるのと同時に、熊本藩と同じように、風俗統制、治安維持、金銀の流出抑制などの課題が露呈してきた。領主たちは、超領域的（「グローバル」）な市場原理にもとづく経済的な利益を取るか、それとも統制を強めて領域支配を貫徹させるか、ジレンマに苦しむことになったのである。

だから「江戸時代には芝居は厳しく弾圧された」という言説

は、芝居と社会の関係のほんの一面にすぎない。実態はもっと複雑で多面的だ。その一筋縄ではないかな藩政運営の難しさを見るにつけ、さまざまな政策のバランス上で揺れ動く現代社会を思わずにはいられない。江戸時代と現代と、世の中は大きく変わったようで、あんがい人間の苦悩には共通するものがあるのかもしれない。

私たちには、私自身も含めて、「歴史」とはこういうものだ、と思い込んでいる部分が多々ある。だが「歴史的事実」というものは、史料一つでひっくり返ることがある。ここに書いた熊本藩の事例も、明日には訂正されるかもしれない。しかもやつかいなことに、史料も平気で「嘘」をつく。すべての史料に「真実」が書かれているとは限らないし、そもそも「真実」は多面体である。だからこそ、あらゆる史料を吟味しながら、さまざまな角度からみて「最も蓋然性が高いところ」を探る作業が必要になる。それが、科学としての歴史学の手法だ。そうやって、さまざまな「思い込み」と闘った果てに新たな思考の回路を切り拓くこと（もちろんそこに新たな「歴史的事実」が含まれることもある）が、歴史学の一つの目標ではないだろうか。

ある歴史書を読み終わって顔を上げたとき、これまでと違った色あざやかな風景が見える——そんな境地に、読者としても著者としても、達することができたらと願っている。そして、一人の芝居ファンとして思う。「芝居」と「歴史」は、とても似ている。一己の人生をはるかに超える時を刻み、気まぐれな多面体で、だけど人生に豊かな実りをもたらしてくれる。この偉大な「先達」たちの恩恵に、ただ心からの敬意と感謝を表したいと。

忘れられたデザイナー ボニー・キャッシン



相 原 浩 之

(平成元年卒)

婦人服の歴史を考える時、その時代、時代を生きて来た女性たちの生き方、社会的地位、そして女性が勝ち取ってきた権利を抜きに語る事はできない。私は25年前にファッションの仕事をする場所としてニューヨークを選んだ。アメリカの経済そして文化の中心地であるニューヨークに生きる女性たちは、リベラルな考え方を持ち、「男女同権」という理念のもと、職場では男性と肩を並べて働き、家庭では家事に奔走する多忙な女性たちであった。私はニューヨークに移り住んで、現実にもそのような女性たちの生き様を目にし、「ウーマンリブ」という概念なしに、アメリカのファッションは語れない事を実感した。そのような忙しい都会の女性が求める服とは、実用的で機能的な服であり、見た目の美しさ以上に、着心地が良く、仕事や家事をこなす上で動き易い服であることが何よりも重要なのであった。パワースーツにスニーカーの「ワーキングウーマン」は映画の中だけでなく、現実にウォールストリートを闊歩していたのである。

私がパターンメーカーとして大いに影響を受けたボニー・キャッシンはそういう働く女性のために既製服を作った最初のアメリカンデザイナーと言えるかもしれない。レイヤードルック」と言う言葉を生み出し、初めて乗馬ブーツをファッションとして婦人服に取り入れたこの革命的なアメリカのデザイナーについて、日本では、いやアメリカでもあまり知られていない。今回、寄稿文の話をいただいた時に、この「忘れられたデザイナー」に焦点を当て、アメリカの婦人服の歴史を改めて振り返ってみようと思い筆をとった。

私はボニー・キャッシンというアメリカのデザイナーの事を、ニューヨークに移り住んでから知った。親しい友人からちよつとした集まりに着ていく服を作って欲しいと依頼され、インスピレーションを求めてオンラインサーチをしている時に、ある画像に目が留まった。見た目はウール地の裾幅が広く、丈の長いくあるギャザースカートのだが、スカートの両膝のあたりに犬の首輪と散歩用の紐を繋ぐ為の金具(ドッグリーシュ)が付いている。金具を引っ掛ける他方の金具はウエストベルトの縫い代に挟み込まれていて、膝の金具をウエストの金具に引っ掛けるとスカートの前丈がすねのあたりまで短くなるのである。しかも、そのたくし上げられた部分は美しいドレープとなつて、前衛的なデザインにもなっているのであった。私はこのスカートをたくし上げるデザインの発想を借用して、黒のシルクタフタに紫の裏地を付けたスカートを作った。金具は片膝にだけつけて、機能性よりはデザイン性を重視して、金具を

引っかけた時に紫の裏地と彼女の片方の膝下が大人っぽく見えるデザインに仕上げた。

しかし、その時はまだこのスカート（ドッグ



著者 Coach Spring 2022 Collectionの為にアイデア試作

リースユスカート）が、1960年代にボニーがシルズ社のために作ったアンサンブルのスカート部分であった事は知らなかった。その後、私はコーチ社にパターンメーカーとして入社し、ボニー・キャッシンという偉大なアメリカのデザイナーが居たことを知る。彼女は1960年代にコーチ社とカバンデザイナーとして契約を結び、彼女がデザインした幾つかの鞆は今も定番商品として販売されている。そして彼女へのオマージュとして企画されたコーチ社2022年春夏のコレクションで、私はまたこのアイコニックなスカートと巡り合うことになった。

ボニー・キャッシン (Bonnie Cashin 9/28/1908 - 2/3/2000) 1908年アメリカはカリフォルニア州オークランドで生まれる。写真家の父とドレスメーカーの母のもとに生まれ、読み書きを覚える前から裁縫ができた、と本人も語っている。ロサンゼルスハリウッドにある高校に進学。彼女自身は絵描きとし

て成功することを夢見ていたが、高校を卒業する前からロサンゼルスバレエカンパニーにその才能を見出され、団員の舞台衣装の作製に携わるようになる。その後1934年にニューヨークに進出。この時もロキシ劇場の24人のダンサー、ロキシッツの衣装を担当していた。

1930年代のアメリカは、好況に沸く、狂騒の二十年代を経て、1929年のウォール街の株価大暴落が引き起こした大恐慌時代から始まる。そして世界は第二次世界大戦へと暗い時代を進んで行くのであった。理想の女性像は20年代のフラッパーに代表されるような、ショートヘアに短い丈のドレスを着たほっそりとした享乐的な女性から、30年代に入ると、女性らしい曲線の体の線を生かした長い着丈のドレスを着た、落ち着いた見た目の女性が好まれるようになる。髪も長めでゆったりとカールした髪型が流行る。当時、アメリカのファッションはパリのファッション業界の影響をともに受けていた。ヴォーグ、ハーバース・バザーといった高級ファッション誌はパリで活躍するデザイナー、クリスチャン・ディオールやクリストバル・バレンシアガの特集を組み、パリで流行のスタイル、ニュールックを紹介する事に大半のページを割いていた。そのようなパリ一辺倒のアメリカのファッションが変わるきっかけになったのが第二次世界大戦であった。

1930年代後半、フランスのファッション業界は第二次世界大戦の戦禍の中にあり、大打撃を受けていた。折しもアメリカでは、百貨店ロード&テイラーを率いる、全米のマルチミリ

オンドラーカンパニーで初の女性社長、ドロシー・シェイバーを中心に、アメリカンルックと称したアメリカ人のデザイナー育成運動が高まっていた。大恐慌の中、アメリカ経済の再復興を目指したニューディール政策もその運動を後押しした。こうしたアメリカンルックの動きはバリを中心とした高級（高額）なファッションのアンチテーゼとして、アメリカの中産階級の労働夫人の間で広がっていく。ボニーはそういう時代に生まれたデザイナーの一人だったのだ。

ボニーはとても活動的な女性であった。売れっ子のデザイナーとして多忙なスケジュールをこなしながらも、プライベートルでは愛車のコンバーチブルのロードスターを乗り回し、世界中を旅した。旅先ではスケッチブックを取り出して気ままにスケッチを楽しんだ。彼女がデザインした服はある意味、活動的な彼女自身のライフスタイルに合わせてデザインされたと言っても過言ではない。実際、彼女が生み出したいくつかのアイコン的なデザインは彼女の生活の中から生まれた。

彼女のアイコン的なデザインの一つに、大きながま口パースをポケットとして縫い付けたコートやケープがある。これは実際に山



著者 がま口ポケット試作

登りをする時に、鞆を持たずにスケッチ道具を持ち運ぶために彼女が考えたものだ。がま口をつける事でポケットから物が落ちる事がないように工夫した。このような大きなポケットはその後も色々とバリエーションを変えて使われ、鞆を持たなくても物が持ち運べる機能的なデザインとして彼女のシグニチャーになった。

私とボニーを結び付けた例の『ドッグリースカート』も彼女の仕事場がビルの2階にあったからこそ生まれたデザインだと本人が語っている。『マティーニグラスを片手に、階段を登り降りする時に、長いスカートを邪魔だったの』。先のがま口ポケット同様、動きを制限する長い丈のスカートを、動きやすい機能的な服にするために生まれたデザインだったのだ。

このような金属のがま口やドッグリースユの金具などを婦人服に持ち込んだことも彼女の大きな功績である。現在もコーチ社のシグニチャーである真鍮製の『ターンロック』は彼女の愛車のコンバーチブルの幌を固定する金具だった。車に使われていた金具を婦人服のボタンの代わりに採用したのだった。

彼女の機能的な洋服はまた彼女が若い頃に舞台衣装をデザインしていた事も大きく影響している。着心地の良さを追求するためにボニーはダンサーの動きを最大限にする、コスチュームデザインの技術を既製服に取り入れた。彼女がデザインした『フリーアクションスリーブドレス』は袖下にマチを入れる事で、腕の可動域を広げる工夫がなされている。ボニーはこのドレスにより1938年にヴォーグ誌より賞を受けている。

また、ボニーは洋服だけでなくカバンをデザインする時も忙しく働く女性たちの事を忘れなかった。60年代にコーチ社から「キヤシンキャリー」と言う名で売り出され、今でも同社のアイコンとなっているトートバッグは発売当初、大中小の3つのサイズがあり、それぞれ小さいバッグが大きいバッグの中に納まるようにデザインされていた。これも、「家事や子育てをしながら働く女性がカバン一つで仕事場に行くなんてありえない」という彼女のファッション哲学のもとに生まれたデザインであった。

彼女のデザインした物には、忙しく働く女性たちの生活を豊かにする工夫が施してあることを見てとることができる。「私は服のことだけしか考えていない（上流社会の）女性たちの為の服は作らないの」。そのファッション哲学は一生変わらなかった。彼女がデザインした服は過剰な装飾がなく、機能的であるため、今でも通用するような現代的なデザインが多い。このような服が半世紀以上前に作られていたのは驚きである。そのため彼女のデザインを模倣した作品が近年でもよく見られる。

しかし、そうした現実とは裏腹に彼女の名前はファッションを生業としている者の中でもあまり知られていない。一つの理由として、彼女が企業デザイナーであったことが挙げられる。彼女は自分の名前のブランドもデザインしていたが、生涯に35社に及ぶ数多くのブランドのデザインを手がけた。彼女を代表するデザインの多くはシルズ社やコーチ社、エルメス社などのためにデザインされたものであったのだ。

しかし、彼女の名前が忘れ去られた最大の理由は、彼女がハーフファッションのデザイナーを目指さなかったことにあると思う。ボニーは自分を投影した、忙しく働く中産階級の女性に向けてデザインしていたのだ。彼女は名声を得るためだけにデザインする事はなかった。彼女にとってデザインは、忙しい女性の生活を快適にするために生まれた知恵のようなものであったのであろう。時に垣間見えるそのユーモア溢れるデザインは純粹な意味での「創作」であった。洋服の構造、機能を知り尽くした上での創作であった。そのような彼女の作品が持つ、純粹で飾らないデザインが彼女の作品を普遍的な美しさへと昇華し、時代を超えて見る者の心を打つのだと思う。

（参考資料）

"Bonnie Cashin Chic is where you find it" by Stephanie Lake

"Coach A Story of New York Cool " Rizzoli

"The Forgotten Designer Behind Some of Fashion's Biggest Trends"

The New York Times May 10, 2016 by Christopher Petkanas

夢の中で生きる



中村 弘峰

(平成16年卒)

博多人形を代々作ってきた家に生まれた僕は、幼い頃から人形師になるのが夢だった。メディアのインタビューなどではよく「父にうまいこと洗脳されて」と話しているが、実際のところは家業と僕のお互いのニーズが一致していることに気づいたからだ（そう思えるように洗脳されたかもしれないが）。幼い頃から絵、ブロック、工作などは得意でアイディアもどんどん出てくるし時間も忘れるほど没頭していた。逆に他のこと運動はからつきしダメで勉強は普通よりちよつと下。一番難しいのは、今の僕しか知らない人なら考えられないだろうが、人と話すことだった。引つ込み思案で断りきれないタイプ。あまり自分の意思を表に示すできない子供だった。それゆえ、拙いながらも自分の考えたことを自由に表現できる絵やブロックに夢中になっていたのだろうと思う。

こういう子供だったので、日々粘土で人形を作ったり色を塗ったりしている父や職人さんのことを見て憧れを抱いていたし、もし僕が将来跡を継いで人形師になったら「毎日夏休みやん！」と思っていた。そして、保育園の卒園文集に将来の夢は

「人形師」と書いてからその夢は大人になるまでずっと変わらなかった。そして、僕は人形師になった。つまり、夢は叶ったということになる。

将来の夢が叶ったという人はどれくらいの割合でいるんだろうか？僕の場合はただただ運よく継ぐべき家業というものが存在していた為、ついに夢を叶えたというような感覚はあまりないが、アスリートや医師、士業、起業家など並々ならぬ努力を重ねてついに夢を叶えた人のことは本当にすごいと尊敬している。

先日、社会人講話の依頼を出身中学からいただいた。依頼文には「特にお話して頂きたいこと、現在の職に至るまでや起業（仕事）することについて、やりがい、厳しさについて」と記されていた。さて、どうしようか。人形師という仕事の具体的な内容を今の中学3年生150人に話して、彼ら彼女らはどう感じるのだろうか。受験を控え、将来の夢がある子、まだない子が混在している状況だ。夢を叶えたという人としての依頼だと思うが、アスリートや起業家のようなタイプの話はできない。そこで僕はある著名な歌人の息子さんの話を思い出した。

その歌人の方が宿題をやつては「疲れた」と投げ出す息子さんに「遊んでる時は全然疲れないのにね」と軽くイヤミをいうと、その息子さんは「集中は疲れるけど夢中は疲れないんだよ！」と言った。なかなか粹な表現だ。と、僕はこの話を入づてに聞いた時に思った。確かにそうだ。そうだとなく分かってはいたが、どちらのことも集中だと大雑把に捉えていた。苦手なことは集中力が続かないが好きなことなら何時間でも集

中である。そんな時、人は目の前のことに没頭している。後者は集中ではなく夢中だったんだ。思えば僕も、幼い頃の絵を描くとき、工作するときの没頭感には確かに夢中という状態だった。そして、今もそれはあまり変わらない。作品を作る時は夢中になって作っている。むしろ子供の頃よりもはるかに長い時間深く入り込んでいることの方が多い。そして、僕はまたある別のことに気がついた。夢中とは夢の中にいること。ああそうか、僕は夢を叶えたのではないんだと。幼い頃に人形師になりたいたと夢を抱いて、そして、僕はまだその自分で抱いた夢の中にいるのだ。夢の中で夢中になって人形を作っているんだと気づいた。僕は自分の夢の中で人生を生きているのだ。

僕は、中学3年生に話す講話のテーマを「夢中力」とした。彼ら彼女らと一緒に集中と夢中の差について考えてみた。何か自分が夢中になっているものはあるか。あればその夢中の中から将来の夢を見つけ、その夢の中に入っていくような人生について共に考えてみた。理想論かもしれないが、子供たちにはできるだけ大きな理想を掲げて、それを実現していくような現実的理想主義者になつてもらいたいと思った。理想と現実のはざまで大変な思いをすることはあるだろう。けれど、その時、心の支えになるのが夢中の力だと思う。理由はわからないがなぜか自分が没頭できる事柄に全身全霊ぶつけてみる人生を選んでみるのも悪くないんじゃないかと子供たちに伝えたかった。

僕が小学5年生の頃、将来の夢に新たに「山笠を作る」という項目が追加された。それは、父が初めて博多祇園山笠の土居流の昇山の人形を制作することになり、家の隣の空き地に單管

とブルーシートで即席の作業場を作つてすぐ大きな黒田武士の人形を作り始めたからだ。その大きさと迫力に山笠の男たちは大喜びし、いまだに「あの山はすごかった」と語り草になるほどのインパクトを父は残した。いつか自分が昇山を作るときはあの人形を超えるようなインパクトを求められることも大きくなるにつれ分かっていた。そして、小学5年生から20年後の2017年、僕は父から引き継ぐ形で土居流の昇山を制作した。父の人形を超えられたかは自分ではわからないが、自分の夢をまさに形にするという体験は感動的だったし、また、多くの気づきを得ることもできた。それは、山笠は本当に博多の人々の祈りを乗せて町を駆け巡っているということだ。良いこともあれば悪いこともたくさんある人生の中で一年に一度の山笠が人の心の浄化システムになっていると感じた。生老病死、愛別離苦の四苦八苦な人生をそれぞれが受け止めて、山に願いを託す。だからこそ人形の出来栄えに博多っ子は口うるさく、目が肥える。町の長老に「よか山作ってくれた」と言われて安堵するとともにその言葉の重みも知った。そして、僕はまた新たな山笠の意味を知ることとなる。

当家、中村人形は令和二年から櫛田神社の飾り山を制作することになっていた。櫛田神社の飾り山は他の飾り山と異なり、人形師の若手育成の意味も込めて山笠の前面（表という）、背面（見送りという）を先輩と後輩のコンビで制作し、3年間の持ち回りでまた次の人形師コンビへと引き継がれていくこととなっている。であるから、令和二年からの櫛田神社の飾り山は、表を父中村信喬、見送りを僕が制作することとなり、僕にとつ

ではこれが飾り山制作のデビューとなった。がしかし、新型コロナの影響で令和二年、令和三年と二度、博多祇園山笠の昇山は中止となった。

多くの博多っ子にとって初めての静かな七月だった。そこに、男たちのオイサの掛け声はなく、静かに僕たち親子が2か月かけて制作した櫛田神社の飾り山が立つのみだった。昇山は中止とするが奉納行事の灯火は絶やしてはいけないとの櫛田神社と山笠振興会の判断で櫛田神社の飾り山のみ立てることになったからだ。それは、山笠が本来どういうものであるかを僕に強く突きつけた。山笠はただのお祭りではない。神事であるということ。僕は何者かに強く認識させられているかのようにだった。

当たり前にあったものが突然なくなることによって、やがてその大切さに気づくというのは、人間の性だろうが、山笠が突然中止になったことで博多の人は山笠の本当の意味を再認識し始めた。約80年前に疫病が蔓延した博多の町を聖一國師という僧侶が施餓鬼棚に乗って水を撒いて清めて回ったというのが山笠の起源とされるが、新型コロナという新たな疫病が再び人々を苦しめる時、たった1本でも山が立っていることは博多人の心の支えになっているようだった。

いつもの夏であればメディアは「勇壮な山が博多の町を駆け巡ります！」や「東流は櫛田入りのタイムが昨年よりも1秒早くになりました！」などのリポーターの声が流れてきていたが、そもそも山笠とは、という起源や歴史を伝える報道が増えたことはとても良かったと思う。街で「こげなさみしい夏は初めてばい」という声を僕は何度聞いただろうか。そして、「お櫛田

さんだけでも飾り山ができて良かった、立派に作ってくれてありがとう」という声も。そういう声を聞いて、僕は真に実感した。山笠が神事であるという意味。つまり、山笠とは、その行事自体が博多の人々から神様へのお供えものなのだ。

山笠は江戸期には高さ15メートルを超えるものもあり、現代の飾り山よりも高い。それをゆつくりと動かして巡行していたのだが、一説には貞享4年（1687年）、土居流が東長寺で休憩中に、石堂流（現在の恵比須流）に追い越されるという事件がおき、このとき2つの流が抜きつ抜かれつの競争となり、スピードを競い合う「追い山」が始まったとされている。

時は下り、明治31年（1898年）に高く聳える山笠が電線を切ってしまう事故が相次ぎ、中止の危機に直面し山笠は背が電線よりも低く、より早く動かせる昇山と、高さは保ちつつ、より豪華さや物語性を競う観賞用の飾り山に分かれることとなった。

それは、博多祇園山笠にとって転機となった。追い山というある種の競技が、山笠が機動性を手に入れることによってより純粹に速さを追い求められるようになった。そこにタイムを測るようになり、もつと上手く、速く山を動かす技術が必要とされるようになり、昇き手（山笠を担ぐ人）たちは夢中になって体を鍛え、技を磨く。

山笠は男の祭りだと思われているが、実際は老若男女全ての人に役目がある。女性はいりよんさんと言って直会の炊き出しや法被を作ったり直したりなどやることが多く、その分博多の男はいりよんさんには頭が上がらない。子供たちは山笠を担ぐ

ことはできないが、前走りと言って山笠の前方を大声を出して走り、山笠を導いていく。中学生になれば水当番で走る山笠に先回りして水をかけたり、後押しをしたりできるようになる。そしてだんだん山笠を担ぐようになってくる。そして、青年期、壮年期と山笠行事の中心を担うようになり、その後老いて山笠を担がなくなっても、祭りの運営に関わったり後進の育成やサポートに回るなどお役目はいくらでもある。それらの役目のうちどこが欠けても山笠行事は無事に執り行うことはできない。言い換えればそれら全てが山笠であり、それら全てがお供えものなのだ。それが、約800年もの間、博多でこの祭りが続けられてきた理由であり、人と人がうまく結びつきながら、時に穏やかで時に荒ぶるこの国の自然と向き合って生きていくためのシステムだったのだろう。物心ついた頃から身近にある祭りなので気づかなかつたが、人形師になり、コロナ禍が来たおかげで腹の底からそう感じるようになってきたと思う。

そして、令和四年七月、博多っ子が待ちに待った山笠の昇山が帰ってきた。これまでの気づきの全てを僕は土居流の雷電為右衛門の人形に注ぎ込んだ。この人形が街の人々の祈りを受け止めて天に届けてくれる存在になるように願って。

中学校での講話の後、程なくして生徒たち全員からの手書きの感想文が届いた。そこには、「僕も夢中になれるものをこれから見つけていきたいと思います」、「私の夢は教師になることなのですが、ころころ夢が変わっています。中村さんのようにずっと追い続けられるような、教師になった後の将来についても考えてみたいと思いました」、「私は、私が大好きな和歌を守りたい、伝えていきたいという思いが一層強まりました」

「今、進路を決めていく時期で最近親の説得の仕方に困っていたところでした。自分が『やりたい』じゃなくて『夢中』ってことを伝えることの大切さを知ることができました」など、ただ静かに話を聴いていたあの時の生徒たちの感想とは思えないほどの熱のある言葉が綴られてとても嬉しくなった。

いま僕が抱いている新しい夢はなにか？それは、この日本の伝統文化が可能な限りバリエーションを保ったまま未来へと続いていってほしいということだ。今、この国の伝統文化はどんな痩せ細ってきている。筆や刃物など日本の工芸に欠かせない道具を作る工房は毎年少しずつ潰れたり跡継ぎがいなくて店をたたんでいる。先日、博多人形の粘土を作っていた七隈の大原粘土製作所が今年いっぱい廃業すると連絡があった。こちらも理由は後継者不在だった。これからは、どこか他のところの似た成分の土を取り寄せて使ってみるしかないが、博多の粘土のようにきめ細かな土はなかなか見つけれないだろう。こういった現象が日本中で起きている。

僕ができることといえば、まずはこういう実情を発信していくこと。そして、日本の伝統文化を未来に繋げたいと思いつつ、自分の持ち場を守っている仲間を見つけて連携すること。そして、そういう仲間と共に世界に出ていくことだろう。それはまさに昇山のように。人と人がうまく結びつきながら、たくさん祈りをのせて。そうやって、未来の日本に文化をつなぐ。そのためには、まだまだやらなくてはいけないことがたくさんある。前途多難で障壁も多い。けれど、きつと夢中の力が支えになる。

僕も自分の人生だけでは終わらない夢をやっと見つけた。

投稿

あんじょう
安住正夫編

『内容を主とした入試問題選集』
(昭和14年)と伊藤康彦先輩のお話

安部 規子

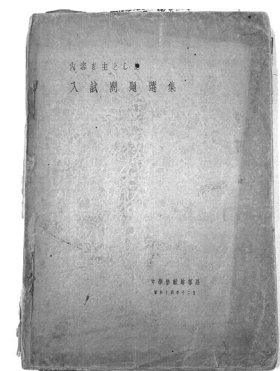
(昭和51年卒)

令和4年は日本では終戦から77年とのことですが、ロシアとウクライナの戦争が続き、戦争と平和について考えることも多かった年となりました。今回、修猷資料館に所蔵されたある英語教材をきっかけとして、戦時体制下での修猷館の英語教育について知ることができました。

戦前に在職した英語の先生たちは、修猷館の生徒に最適な英語教材を求めて、自分たちで独自に英単語集や英作文問題集、英文解釈問題集などを開発していました。その中には出版社から一般に発売されたものもありました。当時の英語教員の一人である安住正夫先生は、昭和2(1927)年から昭和33(1958)年の長きにわたり教壇に立ちましたが、退任時の挨拶文(「修猷よ あなたはゴツかった」『修猷』91号)の中で、熱く活気に満ちた戦前の英語教員たちの雰囲気や、「暗くならうと夜が更けようと、唾を飛ばして語学を論じ、競争でガ

リ版を山の如く切っては刷り、負けん気は皆火の如く、いささか誇張すれば、水滸伝の梁山泊に類していた」と回顧しています。

その安住先生が一人で編集した『内容を主とした入試問題選集』(昭和14年)という教材があります。これは同じ年に同僚の白井文彦先生との共著で三省堂から出版された文法項目を中心とした英文解釈問題集『基本要項の分類による英文解釈問題選』と対を成すものとなっています。『内容を主とした入試問題選集』は地味な表紙にタイトルと「中学修猷館専用 昭和十四年十二月」と記され、続いて目次はなく3年生から5年生までに分けられた英文和訳問題が311番まで並んでいます。



内容を主とした入試問題選集

卷末にこの問題集作成の意図や経緯について詳しく書かれています。それによりまず、類書とは異なり、「内容を中心とした」ことには、「入試」の面と「教養」の面の双方の意図があったようです。低学年で学ぶ英語教科書の題材は子供の世界であり、入試問題で扱われる大人の世界とのギャップが大きいため、中学生には単語や構文の知識があっても英文の内容そのものを理解することが難しい。そこで、生徒たちに多様な大

人の世界に関する英文を読む機会を与え、内容を理解しうる「思考力」「感受性」の涵養を目指したのです。また同時に、多様な大人の世界についての理解は、「基礎教育の目指す教養」であり、「物事の意味を咀嚼して概念にのみ走らぬ用意、ゆとりある批判の素地を養って行動に中を失わぬ用意は、個人生活に於ても、国家の行動に於ても大切である」としています。これは、物事の意味を深く理解し表面的なことだけにだけとられない心構えや批判的思考の基礎を身につけて偏りのない行動をとる心構えの重要性を説いており、当時の日本や世界の情勢も含めて考えると大変深い内容の言葉と感じられます。この目的のため、英文の題材は自然、文化、文学、哲学、科学などの多岐にわたり、時代的背景から戦争に関係がある題材も含まれています。過去8年の英語入試問題4000題から精選した311題が、難易度を熟慮の上、易しい方から配列されています。入試問題から題材を選んだのは、教科書のレッスンより各文章が短くまとまりがあり、さまざまな内容に触れるのに最適と考えたということです。

この問題集の学習を当時の生徒たちはどのように感じていたのでしょうか。昭和17年卒業の「五十四（いそしみ）会」の先輩方は安住先生との縁が深かったようで、卒業後に出された周年記念誌では安住先生や英語授業について回顧されています。福井宗兵衛氏は、『五十周年記念誌』に「安住先生」というタイトルで、「私が修猷で学んだことは安住先生の英語問題集につきる。内容は諸兄のご存じの通り、人間の思考の全領域にわ

たって文科・理科の別なく、あらゆる問題にふれている。私の思考の基礎はこれによって培われたといつてよい」と記しておられます。これこそまさに安住先生が意図したことであり、現在でも同様に教育に求められているものでしょう。

福井氏は、問題集巻頭の英文に加えて、ニューヨークのエリス島を扱った題材やジェームス・ラムの随筆を記憶に残るものとして挙げています。エリス島の話は90語程度の短いもので、アメリカへの移民が必ず通過しなければならないエリス島の移民検査所に関するものですが、福井氏は、この移民検査所にはナチスに追われた多くの人々や、原子爆弾を作った科学者たちもいたのだ、と記しておられます。また、ジェームス・ラムの文章については、「I feel free as air（私は自由だ！空気のよう自由だ！）」という言葉が自分にとって「お呪いだった」とも回顧されています。卒業して50年経った後再び読み直しても新たに感じるころがある深い内容であったと推察されます。令和3年9月に、やはり五十四会の伊藤康彦先輩にお会いして、この問題集を使った実際の授業についてお聞きする機会がありました。この学年の先輩方は太平洋戦争の開戦から間もなく卒業され、卒業後に多くの方々が出征し、23名が戦死されています。令和3年8月の西日本新聞で報じられたように、伊藤先輩ご自身も旧ソ連のウクライナで過酷な抑留生活を経験され、その後復員された方です。在学当時のことについて伺うと、教練の時間以外には戦争の影はいつさい感じなかった、英語の勉強を奪われるというような感じはなかったそうです。開戦の日

が5年生の最後の試験が行われる日だったが、試験がなくなる
と期待して登校してみると何ら変更なく試験が行われた。先生
たちは戦争のことは一言も触れなかったとのことでした。街は
開戦で大騒ぎでも、校門を一步入ると別の世界であつたよう
です。

私がお会いした時、伊藤先輩は97歳でいらしたのですが、安
住先生が作られた問題集の内容についても非常にはつきりと覚
えておられました。安住先生を「安住さん」と呼ばれ、「そう
この話が あつたね、この話では単語の発音も [sandini, だ
よ!] と注意されたね」と懐かしそうに問題集のページをめくつ
ておられました。英文の内容は難しかったが、予習をした上で、
一言も逃すまいと授業に耳を傾けているとよく理解できた、帰
宅して再度読み直しをされていたとのことでした。授業は、最
初、発音のよい生徒に音読させ、単語の意味を他の生徒に尋ね
た後、先生が解説をするといった進め方であつたそうです。巻
末のあとがきで、

安住先生がこの
問題集を「三カ
年半の苦勞の結
晶」としている
ことから、伊藤
先輩は、「我々
は結晶を習った
わけだ、安住さ



内容を主とした入試問題選集
(昭和19年版)

んの面目躍如。よくこの問題集を作ってくれたものだ」と先生
への感謝の気持ちを述べられました。

当時の大内覚之助館長は、前職が旧制福岡高等学校（現九州
大学）の英語教授で、戦時中にも関わらず生徒たちに英語の継
続的な学習の大切さを説いていたとのエピソードがあります。
昭和18（1943）年には、旧制福岡高校の受験科目から英語
が外され、受験のための英語の勉強は必要なくなりましたが、
大内館長の方針であつたのか、英語授業は昭和19年まで行われ
ていたそうです。『内容を主とした入試問題選集』も4、5年
生用の問題から82題を抜粋した昭和19年度版が作成されていま
す。表紙には修猷館の校舎の写真が使われていますが、当時問
題集の用紙を調達し印刷するのは大変なことであつたと思われ
ます。

今回初めて同窓会に寄贈された多くの周年記念誌を拝見させ
ていただきました。特に戦前と終戦直後に卒業された先輩方は
卒業三十、四十、五十周年等の節目の年に立派な記念誌を制作
され、青春を取り戻すように交流を深めておられる様子も記録
されています。また、戦前に自主作成された英語教材からは、
時代的な制約が大きかった中でも変わらない当時の先生方の教
育に対する情熱や誇りが伝わって来るようです。こういった貴
重な史料が今日まで保存されているのは館長先生や同窓会及び
資料館運営委員会の皆様のご尽力によるものと深く感謝申し上
げます。

修猷魂と生くる



馬 淵 崇
(平成12年卒)

修猷館高校を卒業してから20年以上が経ちました。これまでの人生を振り返ってみると、修猷魂に導かれて生きてきたことに気付かされます。

「世のため人のために、情熱を持って挑戦し続ける」。私にとって、修猷魂とはそのような意味合いのものです。常に意識し続けていた訳では無いのですが、それは必要なときに必要な熱量で、私を後押ししてくれたように思います。

在学中は学業においてもスポーツにおいても、特筆すべきような成績は残していません。

唯一誇れることがあるとすれば、大運動会に全てを注いだあの夏くらいでしょう。将来の夢や目標も無く過ごした3年間でした。同級生には当時から「医者になる」「国連で働く」「NASAで働く」「NBAでトレーナーになる」といった明確な目標を持ち、実現していた友人がたくさん居ます。そんな同級生たちを差し置いて、私が修猷魂について語るのとは少々気が引けますが、そこは自由で寛容な修猷館の校風に甘えたいと思います。

ます。

私は修猷館を卒業後、一年間足踏みをしたのち九州大学農学部に進み、愛知県に本社を構える開発コンサルタント会社に就職しました。その会社で、日本各地の農業に必要なインフラ整備を目的とする土地改良事業に5年間程携わりました。ときには数千億円規模の事業の費用対効果分析を行う一方で、開発現場である地域のことや農業のこと、そして農家のことを全く知らないことに気付きました。

「もつと現場のことが知りたい。もつと現場に喜ばれる仕事が見たい」。当時は口癖のようにそのようなことを言っていたと記憶しています。

そんな折、会社の研修プログラムの一環でJICAのODA案件に参加出来ることになりました。エジプト、フィリピン、タイ等の他、複数の選択肢の中から私が選んだのはアフリカのエチオピアの案件でした。

折しもエチオピアの隣国ソマリアで国際NGOの医師として活躍されていた修猷館OGの先輩がトラブルに巻き込まれたことが報じられていた時期。私も在学時に学んだS先生の先輩を心配するコメントをニュースで観て、事件の恐怖をより身近に感じたことを覚えています。それでも「せっかく学ぶ機会を得たのであれば、一番困難が予想される国を選ぼう」。先輩のご無事を折りつつ、私自身先輩の勇氣に突き動かされる形でエチオピア行きを決めました。プロジェクトエリアは首都アジスアベバから車で13時間程かかる北部のアムハラ地域。滞在先の

ホテルでは停電は日常茶飯事、シャワーは隣の湖の水がそのまま使われており、さらに奥地に進めばその水すら無いような場所でした。過酷な環境ではありましたが、苦難に遭遇しながらも国際協力に取り組んでいる先輩に恥ずかしくないよう、現地の住民の暮らしのために、コンサルタントとして出来る限りのことに取り組みました。エチオピアで過ごした時間は、私の人生にとって宝物のような経験となっています。

しかしその半年後には、お世話になったコンサルタント会社を退職しました。コンクリートから人へ。日本社会全体で公共事業の是非が問われる中で、開発コンサルタント業界は少なくとも無い影響を受けました。「政権が代わったくらいで無くなるような仕事に、情熱は持ち続けられない」。今思えば、とても浅く短絡的な考え方ですが、若さもあり再就職先を決めることなく脱サラしました。

それでも一つだけ決めていたのは、現場の生産者に近い仕事をするということでした。まず取り組んだのは、ご縁を頂いた糸島の農家をはじめとする生産者の方々のお手伝いでした。しかし、大豆の草刈り、醤油のラベル貼り、キャベツの収穫といった一見単純な作業でさえまなまりません。草刈り中は暑さに悲鳴を上げ、貼った醤油のラベルは斜めに傾き、収穫したキャベツには傷を入れてしまい商品にならなくなる…。コンサルタント時代にあれだけ求めていた現場で、全く役に立てない自分の未熟さを思いました。

そんな自分を支えてくれたのは、修猷館在学時に英語のT先

生がいつも仰っていた「志なきところに道なからん」という言葉です。逆に言えば、志があればいつか道が開けるはずではないか。私の志の第一歩は、土作りや栽培、製造、そして地域に對して情熱をもった取り組み糸島の生産者の皆さんを、シンプルに格好良いと思うことから始まりました。彼らの力になった、彼らを喜ばせて、一緒に仕事が出来るとな自分になった。そのような憧れを抱いたことが原体験として、今の自分に大きく影響を与えています。

そして彼らのような生産者に対して、私なりの義理や恩義を尽くしていく中で、少しずつ糸島という地域に對する愛着が生まれ、志が醸成されてきたように思います。僭越ながら、T先生の言葉に下の句を付けさせて頂くとすれば「志が無ければまず義を尽くすべし」といったところでしょうか。高校時代に先生の指針となるような言葉に出会えたことは、幸運なことだったと今になって思います。

糸島に移住して1年が経った頃、ご縁に導かれるように糸島の地魚にこだわった飲食店を開業することになりました。お店のコンセプトは「お客様はもちろん、生産者にも喜ばれるお店」。糸島で水揚げされた魚しか使わないこと、仕入れて絶対にデイスカウントしないことをルールとして決め、創業以来今に至るまで11年間続けています。

オープンに際しては、たくさんさんの修猷館の同級生が力を貸してくれました。お店で使う什器類やレイアウト決めはインテリア関係の仕事をしていたM夫妻、スタッフTシャツのデザイン

には芸大を卒業したUさん、オープン前日の夜はEくんが徹夜でTシャツ作りを手伝ってくれました。みんなの力を出し合いながら、目的を達成しようとする時間は、さながら修猷大運動会のようなものでした。開発コンサルタントから飲食業という、全く異分野への新しいチャレンジでしたが、ガムシヤラに取り組むことが出来たのは高校時代の仲間達のお陰です。

有難いことに今でもお店には同級生たちにはもちろん、後輩や諸先輩方、修猷館の先生までお越しくださいます。その度に、恥ずかしく無い商売をしないと身が引き締まる思いをしております。

このようにたくさんさんの館友の皆様のサポートを頂きながら、糸島の地魚と10年以上向き合う中で、漁業や地域が抱える課題を深く認識するに至りました。

漁業に関しては、魚価の低迷や資源の枯渇、後継者不足、海洋ゴミ問題等、取り巻く環境は年々厳しさを増しています。この10年間だけでも、いくつもの漁が衰退していく様子を目の当たりにしてきました。

地域に関しては、昨今全国的にも糸島ブランドが注目されるようになりましたが、海辺のカフェやおしゃれなクラフト雑貨、豊かな自然を求めて多くの観光客が訪れる一方で、ゴミや騒音、渋滞問題等、地元住民にとって看過できないようなことが起こっています。

糸島の先人たちが築き上げた伝統や文化に光を当てることなく、日々の営みの中で大切にしてきた想いが蔑ろにされるよう

では、糸島ブランドの価値は減衰していくに違いありません。どちらも一朝一夕で解決できるようなものではありませんが、少しでも私達に出来ることは無いかと考え、現在二つのことに取り組んでいます。

一つは、地魚の価値を高めるために「地魚BANK」という会員制の仕組みをつくりました。地魚BANKでは、会員から資金を集め、漁師や地域事業者や消費者が一体となって商品開発やピーチクリーンアップ、魚捌き教室や体験イベント等を企画・運営しています。

もう一つは、ワイナリーの建設です。地魚に合うワインを開発するべく、私自身が耕作放棄地を耕してブドウ農家になり、醸造家になります。

どちらも初めての挑戦ですが、地魚の価値を高めるため、また地域の発展のために必要な挑戦だと確信しています。さりながら新しい挑戦をするとき、不安はつきものです。

プロジェクトの成功のためには、資金集め、ワイナリー建設地の整備、醸造技術・栽培技術の習得、そして醸造免許の取得等、様々なハードルがあります。

これらの不安を前にしたとき「新しき計画の



仕事の写真

成就是只不屈不撓の一心にあり。さらばひたむきにただ想え、気高く、強く、一筋に」という修猷館にゆかりのある中村天風氏の言葉が、私に勇気をくれます。この言葉は、経営破綻したJALを再建する際、故稲盛和夫氏が社員向けに引用したことも知られていますが、そのような国家レベルの一大事業の場面においても、修猷魂が発動していた事実にいつも奮い立たされるのです。

このように振り返ってみても人生のターニングポイントでは、先生から頂いた言葉や諸先輩方のご活動、同級生など修猷館のたくさんの方々に支えて頂き、勇気づけられてきたことを実感します。しかし、やはり修猷生たるもの自らの生き様の下、血肉となった言葉を産み出していかねばならないと思っています。

私が修猷魂と共に生くる中で、大切に行っている言葉は「闇を育てる」と「制限が自由を産み出す」です。

小さい会社ながらも日々地魚と向き合い、従業員やその家族の人生を背負う中で、会社を辞めようと思ったことは一度や二度ではありません。コロナ禍でお店を開けられなかったり、体調を崩したり、スタッフが居なくなったり、思うような利益が出なかったりと困難に直面する度に、心が折れそうになりました。それでも人生何事も陰と陽、光と闇、裏の無い表は無いと自らの言い聞かせることで何とか踏ん張って参りましたが、一難去ってまた一難、どうにも闇ばかり続くのです。であるならば、光り輝く成功を追求めるのではなく、辛く痛みを伴う闇

を主体として向き合う中で、成長しようと思うようになります。そして「育てる」という言葉に積極心を込めることで、自身の魂は躍動して参りました。

次に「制限が自由を産み出す」とは、地魚という質・量・時期に限りのあるものと向き合う中で、何とかその価値を高めようと、飲食だけではなく、ツーリズム事業やワイナリー事業に挑戦することになったことから実感しているところです。ある種の制限があることでむしろ自由な発想が生れる。翻って、自由を重んじる修猷館において、その自由そのものが制限であるとするならば、それが産み出してきたものとは一体何なのか。しょうか。

それは修猷館で学んだ者が生涯向き合い続ける命題なのかもしれませんが、間違い無く言えることは、物質的価値を追い求める社会が行き詰まり、後世に残すべき精神的価値にまなざしが向けられる中であって、修猷魂が果たすべき役割は決して小さく無いということだと思います。

高校3年間を過ごした学び舎に遍満していた修猷魂は、宇宙でたった一つ、それぞれの館友が持つ固有の情感と核融合をおこしながら、今後も様々な場所で燃焼し続けていくことでしょう。

そう遠く無い未来に、館友の皆様と最高の地魚と極上の一杯を味わえる日を楽しみに、この広い宇宙のほんの小さな一隅を照らすべく精進して参ります。

「前福岡県知事 小川洋さんを偲ぶ会」

初盆会」報告



「偲ぶ会」実行委員

橋 山 義 博

(昭和43年卒)

「コロナ禍の中、小川知事には線香も上げられず、追悼の言葉もかけられなかった。何とかその機会を作ってもらえないのか」——昨年(令和4年)8月9日、福岡市の「ホテル ニューオータニ博多」で開かれた「偲ぶ会 初盆会」は、多くの方々のこんな声に押され、また、励まされて実現したものです。コロナウィルス感染はやや小康状態とは言え、遺族や各界からの招待者、発起人会・実行委員会メンバーらによる午後1時からの式典に約200人、その後の一般参列(午後2〜4時)に約1,000人が来場されたことは実行委員会の末席を務めた者として本当にありがたく、物心両面から多大なご協力をいただいた多くの皆様方に心からお礼を申し上げます。

式典は無宗教で開催。進行、会場構成、展示物、献花要領などは全て主催の発起人会(代表〓松尾新吾・九州電力特別顧問)、実行委員会(委員長〓上野道雄・福岡県医師会参与、昭和43年卒)、小川家(喪主・小川葉子さん)の3者で協議、決定しま

した。

当日は厳粛な雰囲気の中、式典では全員で黙祷を奉げた後、松尾発起人代表の主催者挨拶に続き、発起人特別参与の服部誠太郎・福岡県知事、京都大学と通商産業省で小川さんと同期の望月晴文・元同省事務次官、上野実行委員長の3人が追悼の言葉を述べました。服部知事は「あなたは知事として故郷・福岡県と県民のために、しっかりと、ひたむきにやり組まれた。福岡県が着実に発展したことは、紛れもない、あなたの大きな功績です」と称えてくれました。

一般参列の会場では、在りし日の小川さんとの思い出話に花を咲かせ、その遺徳を懐かしむ心温まる交流の輪が広がりました。逝去(令和3年11月2日、享年72)から9カ月を過ぎてなお、目頭を押さえて涙ぐむ弔問客の多さにも驚きました。『県民幸福度日本一福岡』実現を目指し、常に現場主義を貫いた小川さんの優しく、誠実な人柄がここでも証明されていると感じました。開催に至る経過の中で、実行委員会が最もエネルギーを要したのは、①発起人会と実行委員会の組織づくりと、②開催費用の捻出です。

①で、発起人会は上野実行委員長が横倉義武・前日本医師会会長(昭和38年卒)を通じて松尾さんに代表就任を依頼、その快諾を得たことが大きく、その後、特別参与に桐明和久同県議会議長も加わり、最終的に当初予定の2倍に近い30人の方々にご就任いただきました。松尾特別顧問と服部知事の早々の就任がその後の呼びかけに大きな力を発揮したことは間違いありません。

せん。実行委員会も上野委員長のほか、渡辺正・副委員長Ⅱ昭和43年卒、修猷四三会長▽待鳥眞人・副委員長Ⅱ昭和47年卒ら約80人まで陣容が整いました。

②では、出来るだけ「小川家」にご負担をかけないことを原則にしました。参列者の「密」を避けるために、会場は大きなホテルを余儀なくされ、費用の見積もりはかなりの高額になりました。運営の中心となる「修猷四三会」は73歳の高齢者集団。本当に大きな数字でした。企業や有志に浄財を募るにも、どの程度集まるかは全く不明で、「最悪の場合、みんなで負担し合わなければ……」と、悲壮な覚悟でスタートしました。

それでも、いざ活動を開始すると、手分けしてお願いに回った企業のほとんどから「喜んで、出来るだけの協力をさせてもらいます」と即答いただき、個人の分も含め、寄付受付口座（銀行2行）には続々と振り込みが届きました。

おかげさまで、当日の持参していただいた香典も加えて、開催費用は賄われ、余剰金から9月22日には福岡県に百万円の寄付も出来ました。昨年10月22日に費用等についての会計監査が行われ、承認されました。

私事になりますが、毎日新聞記者出身の私は小川さんの依頼を受け、約10年、選挙での街頭演説や集会でのあいさつ文執筆から公約づくり等に参加させていただき、時には市民の本音を届けたいと、生意気に意見具申もしました。「街の様子を肌で感じてほしい」と、2人で昼休みに県庁から博多区下川端に290円ラーメンを食べに行ったこともありました。この店の高齢の女性店員さんから聞かされたことですが、その後も小

川さんはその店に2、3度足を運んでくれたそうです。私は全く知りませんでした。小川さんはそんな人です。

「偲ぶ会」が無事に終わったことで、私は2つのことを確信しています。小川さんの闘病生活に医師として最後まで寄り添った上野実行委員長が昨年の「善哉」に投稿しました。抗がん剤治療中に見せた回復への執念に対して「やはり小川君はただ者ではないと心の底から思った」と。私は今回、「政治家としても超一流だった」と断言したいと思います。

もう一つ。修猷館同窓会メンバーの力強さ、パワーです。第一線で活躍されている先輩、後輩の何と多いこと。数度にわたる2,000通を超える趣意書の発送など、気の遠くなるような力仕事にも多数馳せ参じていただきました。

最後に「偲ぶ会」の開催に支援してくださった多くの方々へ再び感謝の意を表し、また、今後小川さんのような「傑物」が同窓生から輩出することを期待して報告に替えさせていただきます。

修猷館万歳！



キャリアセミナー

GO 獣会キャリアセミナー



真 子 千 里

(平成5年卒)

3年ぶりに、対面での卒業生キャリアセミナーを実施しました。在校生たちは、初めての卒業生キャリアセミナーです。主催する我々にとっては、未知のイベントの運営でした。

最大の難関は講師探し。同期から講師を40人(40講座)立てるのが目標です。

過去のキャリアセミナー部長だった先輩いわく、「講師は、キャリアセミナー部会で選んでから依頼した方が良いわよ。『講師をやりたい人いますか?』って公募すると、修猷生はみんなやりたがるから、殺到して調整するのが大変よ」とのこと。え?

それって、いつくらいの修猷生ですか?

残念ながら、私の同期から40人がハイハイと手を挙げて殺到

しそうな雰囲気、まったく感じないんですけど…。

というわけで、先輩の助言を無視して、公募に公募を重ねました。そして、手を挙げてくれた同期が十数名。

期待していたよりも多い!

ここからが本当の難関です。部会メンバー総動員でスカウト活動を展開すること約半年。そして、最終的に38名の同期が教壇に立つてくれることに。立候補してくれた同期、スカウト依頼を快く引き受けてくれた同期たちに、心から感謝です。

当日の5月27日は快晴。午後の気温は25℃を超え、時折強い風が吹いていました。講義の時間を迎え、各講座の代表生徒に案内されて、講師がそれぞれの教室へと向かいます。

みんな、どうか楽しんで!

講座は90分。各教室の様子を一つずつ見て回っていた私は、だんだん不思議な感覚が湧き上がってくるのを感じました。それは、教壇に立って話をしている同期たちが、本物の「先生」に見えてきたのです。

「何を話したら良いかわからない」と言っていた彼女も、「高校生に授業なんかしたことない」と言っていた彼も、皆、間違

いなく「先生」になっていました。

すごい! みんなかっこいい!

感動なのか、感激なのか、嬉しさがこみ上げてくるような。

こんな気持ちになるとは、私の予想外。

これは、やって良かったかもしれない。

- ・キャリアセミナーを終えた講師の感想を紹介します。
- ・一生の思い出に残る、価値ある経験になった。
- ・生徒からかけてもらった言葉と直筆の感想文は宝物。
- ・修猷生の理解力や視野の広さに感銘を受けた。
- ・生徒からのメッセージを会社の社員にも自慢した。
- ・母校の教壇で現役生に話せたことは、貴重な経験となった。
- ・30年前の思い出が一気によみがえり、熱い気持ちになった。
- ・将来、一緒に仕事をする生徒が現れるのが楽しみ。
- ・自分が学んできたことを伝える機会の重要性を感じた。
- ・自分の人生を振り返る貴重な時間を持つことができた。
- ・講義中は笑いも取れなかったけど、感想文でちゃんと話を聞いてくれていたことがわかってホッとした。
- ・話したいことが沸いて出てきて、気づけば終了時間だった。
- ・生徒達から多くを学ばせてもらった。刺激を受けた。
- ・準備から講義終了まで楽しかった。
- ・ぎっしり書かれた感想文に、目頭が熱くなる思いがした。
- ・資料作成や話し方を考えたりすることも、自己成長の一環として有意義だった。
- ・現役生とふれ合えたことがとても楽しかった。
- ・同級生と講義前に作戦会議をしたことがとても助かった。
- ・実の娘が受講するという、二度とない貴重な体験となった。
- ・教壇で日々教鞭を執っていた父親を改めて尊敬した。
- ・反抗期の娘が見直してくれた。
- ・思い切って引き受けてよかった。



キャリアセミナー部会のメンバー17名には、最初から最後まで、あらゆる面で助けられ、支えられました。それぞれの特長と技能を存分に発揮し、私の足りないところを補ってくれて、ベストなチームワークでした。本当にありがとう。

令和4年度 卒業生キャリアセミナー

平位 直子	弁護士への道のりと弁護士業について	大保 智宏	海外で暮らす！外資系企業って？やりたいことを叶えていくために
吉田 正彦	大江戸弁護士血風譚！立志編(実写版)一が1割、現実的な話が9割	斉藤 麻希	“Science will win” コロナウイルスに挑む企業の話
木下 智裕	就職先としては最近不人気な「銀行」でも面白い仕事はできます！	北村 奈緒	マーケティング・広報ってどんなお仕事なの？～製薬会社編～
井口 昌彦	銀行の役割と仕事	小川 信	燃える地域医療
藤井 鉄平	「ガスも売ってる」西部ガスグループへ	井手 美穂	医師になったらどんなことができる？何がしたい？一緒に考えてみよう！新型コロナウイルスと奮闘～開業医の立場から～
芦谷 竜門	生活に必要な電気ってどのように製造されているか知っていますか？	花岡 美生	女性が医師になること～30年後のダンス長会～
藤丸 尚子	サステナブルな社会への挑戦(変えるもの、変えないもの)	江口 幸	
竹内理恵子	企業の“変革”事例を参考に個人の“変革”を考える	益田 大輔	ザ・変態学～精神科医がこっそり教えるこれからのメンタルヘルス～
藤野 淳史	リーダーシップの未来～自分らしくリーダーシップを発揮し世界を変える～	小川 洋子	自分がわかる！進路がみえる！“ミッション”を核にした働き方
堀切 圭太	ファッションを中心にアプリ開発と運営のお仕事をご紹介します	大場 洋士	テレビ放送の役割と仕事
岩永 知久	糸島市民の生活基盤を支える価値あるお仕事	松藤 哲	心理学って何？心理士の仕事って何？
中村 健吾	100年に一度の大変革～自動車産業を取り巻く環境変化～	楠本 千穂	心理士として関わる～知的障がい判定と障がい福祉～
宮脇 将志	今からでも遅くない工業デザイン／グラフィックデザインなどのクリエイティブワーク	山田 裕美	意外と知らない「人生に必要なお金の貯め方・増やし方」(入門編)
松田 剛英	クリエイティブ職の基礎知識	中村磨利香	日本・九州を“元気”にした！～経済産業省の地方でのお仕事～
真名子一隆	エンジニアリングとは？	光田 靖	農学部で学び自然を守る
岡田 淳	ハイテクスタートアップのススメ	上田 竹志	文系の研究者は何をしている？
竹内 康一	銀行や公認会計士・税理士とは違う、企業におけるお金に関する仕事いろいろ	林 香織	薬学部の実習を体験してみよう～薬の効き方を調べる～
野見山 亨	転職したら神職だった！	一坊寺美枝	なんとかなる(する)人生～人生は意外とチャンスが転がっている話～
金子 洋明	営業は単なる「モノ売り」ではありません～医療機器メーカー営業のお仕事～	澤木 祐介	え？修猷出て読売新聞社で働いた後、新橋で串揚げ屋のオヤジしようと？

資料館案内

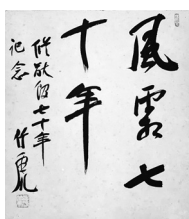
緒方竹虎

渡辺公利

(修猷館高校講師)

資料館第二展示室に『風霜七十年

修猷館七十年記念 竹虎』と記された一枚の色紙「写真Ⅰ」が展示されている。これは日本を代表するジャーナリストかつ政治家であった緒方竹虎〔明治二十一年（1888年）～昭和三十一年（1956年）〕が、英語専修修猷館として再興後七十年となった昭和三十年五月の創立記念式典に出席したときに贈られたものである。緒方は明治三十九年に中学修猷館を卒業したが、当時から剣道の達人であり、在学時に小野派一刀流の免許皆伝となっている。戦前は朝日新聞社の主筆・副社長として言論界をリードし、小磯内閣の國務大臣にもなった。昭和十八年（1943年）、修猷館、早稲田大学、朝日新聞記者を通じて親友であった中野正剛（明治三十八年卒）が東條内閣打倒に失敗して自決したとき葬儀委員長を務めた。戦後、中野の後を継ぐように、昭和二十七年（1952年）福岡一区から衆



〔写真Ⅰ〕 緒方竹虎 風霜七十年

議院議員として選出され、当選一回ながら第四次吉田内閣で國務大臣兼内閣官房長官、さらに副総理に任命された。また、昭和二十八年（1953年）には第五次吉田内閣においても副総理に就任し、昭和二十九年（1954年）自由党総裁となった。さらに昭和三十年の保守合同の中心となり、日本の政界を主導していった。こうした非常に多忙な日々の中にもかかわらず母校を訪れて贈られたものが前記の色紙であり、『修猷館こそは僕の心ふるさとである』（『僕の修猷館時代』より）と記した緒方の思いがこめられたものである。鳩山内閣の後継者として次期総理を囑望されていたが、昭和三十一年一月に急逝したことは惜しんで余りあることであった。同じく資料館第二展示室には「国会内の緒方竹虎」〔写真Ⅱ〕および修猷館の同級生であり親友であった安川第五郎（明治三十九年卒）と談笑する姿〔写真Ⅲ〕が展示されている。



〔写真Ⅱ〕 国会内の緒方竹虎



〔写真Ⅲ〕 緒方竹虎と安川第五郎

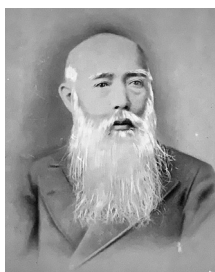
再興修猷館と黒田長溥

大島 泰 治

(昭和32年卒)

第11代藩主黒田長溥(1811~1887)

黒田長溥については、昨年の菁莪の資料館案内で、その肖像画が紹介されているので、ここでは黒田長溥がどのような藩主で、修猷館を再興しようとしたのか、その概略を述べることにする。



黒田 長溥

黒田長溥は第8代薩摩藩主島津重豪の9男で、天保5年(1834)福岡藩主となった。その19年後、嘉永6年(1853)ペリー艦隊が浦賀へ来航し、時代は幕末の動乱期に入った。この時、長溥は幕府の諮問に答えて積極的開国論を主張した少数派大名の一人であった。その後は国事に奔走し、公武合体路線の強化を目指した。列強の要求に従って開国するか否かで国論は二分され、倒幕派と佐幕派との間で戊辰戦争となったが、福岡藩の立場は微妙なものがあった。それは次のような理由によると考えられている。

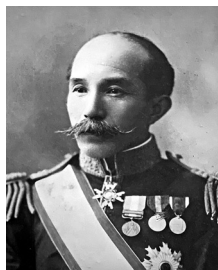
慶長5年(1600)天下分け目の関ヶ原の戦いで東軍に属した黒田長政は、特別な功績があったので徳川家康は家臣に対し、自今黒田氏には格別に目をかけるようにとの遺訓を残し、

これが幕末に至るまで引き継がれたのである。そのため福岡藩は外様大名であるにもかかわらず寛永9年(1632)の「黒田騒動」でも一切お咎めなしという殆ど信じられないような裁量が下されたのである。

長溥は開明思想を持った英明な藩主で当時の海外情勢にも通じていたので、開国して日本を欧米のような近代国家に変革しなければならぬことを深く理解していたが、前述のように福岡藩は徳川幕府とは強い信頼関係で結ばれていたため、薩摩や長州のように倒幕に踏み切ることが出来ない。長溥が提唱したのは「公武合体」で、これは朝廷(公)と幕府(武)との協力によって体制の安定を図ろうとする政治論で、内戦を回避するためには最も妥当な論とされ、諸藩の大名たちの多数意見でもあった。

長溥はこのような時局を見据え、将来の国家を背負って立つ人材の育成を図るため、藩の海外留学生として黒田長知、金子堅太郎、団琢磨、栗野慎一郎等多数の有能な藩士を欧米に派遣している。黒田氏は本来好学の家系で、歴代の藩主は教育が国家の礎であるという信念を持っていた。

しかし時勢は急展開し、官軍となった倒幕派が戊辰戦争に勝利して明治新政府の成立となったが、福岡藩は官軍に属してい



金子 堅太郎

たにもかかわらず、佐幕派が多数を占めていると見なされていたので、新政府の要職に登用されるものは殆どいなかった。僅かな例外として伊藤博文の知己を得て明治憲法の起草に当たった金子堅太郎がいるくらいであった。

明治4年（1871）の廃藩置県により家禄を失った旧藩の士族たちは生活に困窮するものが多く、東京に去ってこのことを耳にしていた長溥は、これを救済する方法について金子堅太郎らに尋ねたところ、筑前士族の人数は多く、これに巨額の資金を投じて数日の衣食の急を救うに過ぎない。それよりはむしろ学校を興して多くの子弟を教育し、人材を養成すれば、その及ぶところは広く、引いては家系を興すことにもなろうというのが金子らの意見であった。長溥はこの説を喜び、黒田家の私財の中から四萬五千円を金子に渡し、修猷館再興を命じて福岡に派遣した。これが明治18年（1885）1月4日のことである。金子は失われて久しい「藩校修猷館」の復活を実現するため奔走し、地元の有志と協議を重ねた結果、当時天神町にあった藤雲館の校舍及び諸器具をすべて買い受けることで合意に達した。金子は次に県庁との折衝に入り、明治18年5月30日県令岸良俊介は「福岡県立英語専修修猷館」の設立を告示、規則を制定発表し、県立でありながら、黒田家出資による再興修猷館が開校した。英語専修については、将来有為の人材になるには英語に通じ、西欧の学問を研究することが最も必要であるとの長溥の強い信念に基づくものであった。再興修猷館は修業年限3年の専門学校として発足した。修猷館はこの5月30日をもつ

て開校記念日とし、この日は授業を休み、職員、生徒一同が福岡市博多区にある崇福寺の黒田家墓所に詣でることを例としたが、これは明治33年全額県費支弁の学校になるまで続いた。明治18年9月10日隈本有尚を初代館長に迎えて開館式が行われた。第1回の入学者は43名であった。

藩史では長溥は悲運の藩主といわれている。それは長溥が幕末・維新の時期、勤皇派と佐幕派の間を揺れ動き、英名な資質を持ちながら、それを藩政に充分に生かすことが出来なかったからである。この時の経験から長溥は教育立国の見地から「藩校修猷館」の復興を見届け、その2年後明治20年（1887）3月7日に没した。享年77であった。

明治初期の黒田藩士の写真

資料館には明治4年に撮影された黒田藩士の写真が展示されており、当時の雰囲気をよく伝えていると思われるので、来館の節はぜひ一見して頂きたいと思う。

写真は右側から武部小四郎、村上彦十で、この二人は明治10年（1877）の西南戦争で西郷軍に呼応して蜂起した「福岡の乱」の指導者達で、



黒田藩士

蜂起は失敗に終わり二人は斬罪となった。中央に立っているのは穂波半太郎で明治9年(1876)の「秋月の乱」の鎮撫のため秋月に乗り込み、反乱軍に殺され、福岡県の殉職警察官第1号となった。四人目は初代福岡市長になった山中立木、左側にコウモリ傘について立っているのが、投石事件当時の第2代館長尾崎臻で、いづれも幕末の勤皇派の志士である。

資料館の収蔵品から(その2)

田 中 敦

(昭和36年卒)

和田 三造 (1883~1967 明治36年卒)

明治16年兵庫県朝来市に生まれる。大名小学校から明治30年修猷館に入学、その後東京藝術大学を卒業し、文部省美術展覧会(文展、後の帝展)で活躍、その後文部省留学生としてヨーロッパ各国を巡歴し洋画を、更に東南アジアで東洋美術を研究した。

帰国後は、洋画のほかに日本画制作、色彩研究、昭和15年東京オリンピックポスター制作、東京藝術大学教授など多彩な活動を行



安川第五郎氏肖像

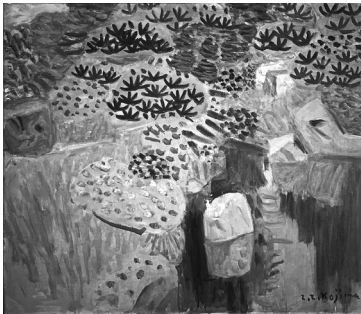
なった。明治40年制作の「南風」は、国の重要文化財(東京国立近代美術館所蔵)に認定、昭和33年文化功労者。

展示作品は、「安川第五郎氏肖像」(P10号)、「赤松」(P10号)、「いかるがの里」(色紙6枚)、書簡2通。この他に「創作図案集」を収蔵。

児島 善三郎 (1893~1962 明治45年卒)

明治26年福岡市中島町の紙問屋の長男として生まれる。中学修猷館時代には中村研一・塚二兄弟らと「パレット会」をつくった。長崎医学専門学校(現・長崎大学薬学部)に進学するが、画家を志望し上京、岡田三郎助の本郷洋画研究所に学ぶがその後は独学で研鑽し、大正14年には渡仏、西洋画の基本を学ぶ。3年半後に帰国したが、西洋の模倣ばかりでなく日本人の絵画を求めて林武、三岸好太郎ら同士と独立美術協会を結成した。

日本の自然風景を装飾化、様式化した作品は、「児島様式」と呼ばれている。また独立美術協会を通じて筑前美術会や福岡県美術協会の結成にも尽力し、地元で活動する足達襄(昭和3年卒)、山田栄二(昭和5年卒)らに多大な影響を与えた。



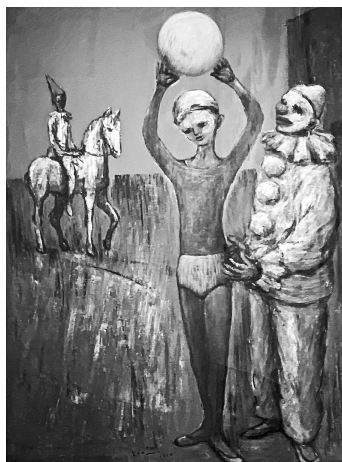
庭

展示作品は、「庭」(F12号)、書簡1通。この他に「太田清蔵像」、書簡1通を収蔵。

伊藤 研之(1907～1978 大正14年卒)

明治40年福岡市大名町に生まれる。中学修猷館を経て早稲田大学文学部に入學する。在学中から洋画家を目指して二科展に出品を続けた。卒業後も二科展で活躍、一時期上海に居住するが、1946年福岡に帰郷した。戦後再開した二科会では、現実と非現実が交差する世界を描写する独自の手法で活躍、福岡文化会館、飯塚文化会館などの壁画作品がある。また制作の傍ら二科会福岡支部長、福岡文化連盟初代理事長を務め、更に九大建築学科講師、精華女子短大教授、九州芸術工科大学(現・九州大学芸術工学部)設立委員など広く郷土に尽力した。

展示作品は「道化とサーカス」(F60号)、この他に「街B」を収蔵。



道化とサーカス

田中 致美(1902～2001)

(1937～1963 修猷館教諭)

明治35年熊本市に生まれる。県立中学済々黉、東京藝術大学洋画科を卒業し、宮崎県立小林中学校、熊本県立高瀬高等女学校(現・玉名高校)を経て昭和12年中学修猷館教諭に着任する。名前は致美(よしとみ)ですが、着任初日マシユマロカットに丸縁メガネ、モーニング服で礼をした姿がカラスに似ていたため、その日から付いたあだ名は「カラス」(平成13年7月11日西日本新聞掲載記事より)。

そのカラス先生が「自分は絵を教えたのではなく、人間教育をやってきた」と言われたことがあります。その結果は、毎年の正月三が日は、在校生、卒業生、更に母校退職後の筑陽学園美術関係者が先生宅に入れ替わりで押しかけたり、先生の白寿記念展を福岡市美術館で開催することなどがありました。

展示作品は、母校図書館に「菁莪堂」(F6号)、この他に「紫陽花」、「思い出の風景」を収蔵。



(旧)菁莪堂

部活OB会

修猷美術TOKYO展15回展を迎えて

Ⅱ 座談会 Ⅱ

修猷美術TOKYO展15回展を迎え、恩師や現役時代とその後
の活動などについて語り合いました。

松本 梨 本日は、明日から開催される修猷美術TOKYO展
15回展を控えて、我々美術部員の現役時代の活動、その後の社
会人としての生活・美術活動、また今後の活動など、自由に話
が進められれば良いと思います。始めに、当時我々美術部の顧
問をしてくださったっていた河原大輔先生の思い出からお話し
いただきますのですが。

坂口 河原先生は1921年東京生まれで、東京藝大彫刻科を
卒業され、1963年に修猷
館美術教諭に着任、同時に美
術部顧問になられ、以来16年
勤められました。作品制作の
楽しさ・厳しさを我々に伝え
てくださり、美術教育の基礎
としての石膏デッサンを部活



坂口 寛敏(昭和43年卒)

で本格的に行える環境を整えてくださいました。そこでしっか
りとした造形力を培う事が出来ました。同時に県の文化会館全
館を借り切って、修猷美術展を実行させていただきました。先
輩の名だたる画家彫刻家の方々の作品と無名の現役生徒が一緒
に作品を発表する機会を我々に与えてくださいました。学業に
身の入らない我々生徒に対しても、おおらかに接してくださつ
て良い部分を必ず褒めてくださる、それが大きかったのかなと
思います。

伊佐 そうですね。三男の美
比古さん(昭和42年卒の彫刻
家)が河原先生を評された
言葉ですが、「人生を楽しみ、
美しい物を愛し、自らの気持
ちに正直に生きた一人の絵描
きの姿だった」と述べておら
れます。これも先生を表す良い言葉だと思いますね。

坂口 私は昭和41年に入学して直ぐ美術部に入るので、部
室は3階の西の端で以前はトイレだった場所だったようです
ね。そこで先輩たちが美術談義に熱くなっていたわろしている所
に飛び込んだんです。しばらくすると先ほど話しました修猷美
術展の開催が近づいてきていて、部員数も多かったんですが皆
で競って大型の作品を制作しました。先輩方には、児島善三郎・
和田三造・地元の足立襄・伊藤研之・安永良徳さん達がおられ、
先輩方の作品と並んで公の場で作品を発表出来た事が、その後



伊佐 裕(昭和44年卒)

美術の道に進むきっかけとなりました。また社会と関わっていき最初の経験だったのではないのでしょうか。その中でやはり核となられたのは当時の顧問の河原先生でした。当時赴任されて2年目だったそうです。先生は東京美術学校（現東京藝大）で彫刻を学ばれていましたので、美術造形の鋭い洞察力と経験のおかげで、部員はギリシャ、ローマ時代の石膏像デッサンを通じて基礎造形が鍛えられたことにより、我々の表現の自由が担保されたのではないのでしょうか。

伊佐 中学を出て高校の美術部に入った途端に、自分にとって別世界がありました。夏には先輩の大学生が来られて交流する中で、自分の将来の生活が予期出来る空気が入って来たと思います。それと勉強が出来なかったから、部室に行けば自分の居場所があった事が大きかったですね。河原先生について言えば、教師であるとともに男として生きる姿があったなと思います。先生は裏の上手というか、作品の中に何かを見つけてくれた。坂口さんが言われたように、野球で言えばノックになると思うのだけど、デッサンで鍛えられた事が大きかったですね。僕は修美展で先輩の中村琢二さんを初めて知ったのだけど、枯れた味の色と筆使いの作品に感銘を受けました。それは自分が1年の時に受けた印象で、ああいう絵が描けたらと常に思っていました。また社会との繋がりを美術展で感じられたことも大きかったです。社会に出て、どんなに閉塞感があった時でも、厳しい時でも、あの大イベントを達成した経験が、その打開の後押しをしてくれました。

松本(洋) 皆さんが言われるように、我々落ちこぼれ組には部室が唯一の心休まる場所だったと実感しますね。作品の制作とデッサンまたいつもの熱い論争の中で高校生活を送り、結果的には造形にかかわる職業に就いた訳ですから、今考えればその後の進路形成に強い影響を与えた、濃い3年間だったのかなと思います。

松本(梨) 私が美術部で思い出すのは部室の空気です。ドアを開けると圧倒するようなペインティングオイルの匂いなんです。今でも油絵を描き始めるとそのオイルの匂いで部室に戻った気分になり、それに励まされる部分があります。また、部室の窓から見た夕焼けの空の色、夏の福吉キャンプで、夜見た夜光虫の青白い光、そんな視覚的な思い出。美しいものを見る目が与えられ、それに反応する感性が鍛えられた事が大きかったかと思われそうです。

松本(洋) 福吉キャンプには先生はもとより酒持参の先輩方も参加され、皆で楽しく過ごしたのもいい思い出です。砂浜でラグビーをやったのも楽しかったですね。

坂口 中学から高校に入って、何となく大人の方へ一歩近づいて、自由を感じたのが大きかったなと思います。自由は修猷館の気質でもありますからね。



松本 洋(昭和43年卒)

松本(梨) 先輩方との繋がりとといった事はどうでしょう。

坂口 美術展の資金集めの為に「貸し絵」のシステムがあつて、先輩の事務所や銀行の壁面に部員の絵を掛けさせてもらつて貸し料をいただき、1ヶ月毎に掛け替えに出かけてましたね。それも先輩との繋がりが、社会との接点だったと思いますね。

伊佐 僕らが入部した頃は既にあのシステムはありましたが、よく考えられたシステムでしたね。今はどうなっているか知りませんが。

坂口 修美展で先輩の画伯達が、美術を志す後輩達と繋がる事を意識して出展された事が大きいと思いますね。今私達も同じ考えで東京修美展をやっていますので、現役の方々も積極的に参加してもらおうといいですね。それと、我々の時代のように先輩が気軽に部室を訪れる事が出来たらいいですね。

伊佐 修猷の共通の気風だと思うのだけど、気安く先輩に甘える事が出来て、先輩方もそれに答えてくださる事が有難いですね。自分も大学一年の時に中村啄二先生の門をたたいて受け入れてもらったのは、やはり美術部と修猷の校風のおかげですね。

松本(梨) 修猷らしい、いい親しみのかたちだと思いますね。ところで、東京修美展についても語っていただきましょうか。

松本(洋) 直接のきっかけは、河原先生が亡くなられた後、安恒さん(昭和45年卒)達が労を取られて、福岡で先生を偲ぶ会が2006年に開かれました。二次会で盛り上がり出たのが修美展復活の話です。我々東京のグループが実行するにあたり、

付けた名前が修猷美術TOKYO展という訳です。

松本(梨) 第一回展は2008年の3月でした。開催出来た要因としてはギャラリー樑を使わせていただいた事が大きいと思います。

松本(洋) それは伊佐君が事業を発展させ、修美展を見越したかのように、ギャラリー樑を持っていてくれたからです。

坂口 それと、我々ずいぶんの期間互いに離れてはい

ましたが、前後の世代も活発に活動していたし、現役の時の活動・人柄・絵柄をそれぞれが認知していたので実行に移せた事と、15年間続いて来たのはメンバーの創作意欲が色褪せていなかった事が大きいですね。

伊佐 それで、確固たる物になってきたし、その間も成長出来たのかなと思いますね。

松本(洋) 修美展で皆がギャラリーに集まると、部室に戻った気分になれるのが嬉しいですね。

坂口 展示作業も皆で楽しんでやれるしね。

伊佐 各々、1年間の生活も報告出来そうです。

松本(梨) 皆が集まると部室の空気が戻って来るんですよ。**坂口** 今日は河原先生の四男の成美さんも開幕前に来てくれました。我々がデッサンを先生に習っている当時の話を色々して



くれて懐かしかったですね。先生が部員の活動に対しておおらかに見てくれて、それぞれが美術をやった事が、次の社会に出た時の活動の源泉になって、それをまたこの東京の部室に持ち寄るようないい循環が来ていますね。

伊佐 OBで部室を持っているクラブは無いかもしれませんね。**坂口** 明日はオープニングで宮崎君（昭和45年卒）が来ますけど、当時の部長だった自分と次の代の伊佐君、その次の宮崎君の時代は核になりましたね。

松本洋 巖佐鈴奈さん（平成8年卒）が、かつて伝説の黄金時代があったと現役時代に聞いていたそうです。東京修美展に出展するようになって、あの伝説の先輩方に会う事が出来たのを、大変驚き、また嬉しかったと話してくれました。随分面映ゆい話ですが。

伊佐 明日はしっかり飲まないかんね。

松本梨 アートと社会との関係などにも、触れる事が出来れば良いと思うのですが。私の仕事は臨床心理士でアートそのものではありませんが、仕事の底辺が美しい物を愛でる感性に支えられる事は大切だと思います。人と人とのコミュニケーションも、美しさを感じるとる柔らかな感性から優しくや思いやりが生まれると思います。



松本 梨久子(昭和44年転出)

ます。それが子供達の日常生活のなかに根付く事を願っています。**坂口** 東原君が前川国男建築事務所、洋さんが鹿島デザイン、伊佐ホームズを立ち上げた伊佐さん、美術から出てそれぞれ社会で活動をされてきた中で、見えている部分には、見えていない部分がある事を分かって仕事をしに来られたのではないかと思います。それが僕は背骨のような物かなと思っています。表現の仕方は、絵になったり空間になったり構造になったり、いろいろあると思うけど、その体験をもつてまた自分の作品もち寄ってくる。それぞれの社会との関わりの中で、経験から出てくる会話も楽しいですね。

伊佐 美術というと固定的になるので、美という事だけで話すと、僕にとつては常に自分の垂直軸というか立体的な物だと思っています。また未来に向かって行く時間軸でもあります。そのバランスの中で生きて来て、絵画もその一部の表現で、大きな軸があつて世の中を見ていこうとする気持ち美術のおかげで宿りやすくなっています。手法というか、釣り合いを見て行く、社会の釣り合い、建築もそうですし、組織の釣り合い、その先端があつて初めて商品が生まれる。そういう商品こそ望ましいと思います。

松本(梨) 人との関係においても、美しさを、調和やバランスを通して、きちんと子供達にも教えられる教育になってくれるといいなと思いますね。

東原 美というものにより、コマーションを含めた社会のあらゆる分野が、人間社会を幸福に導こうとする流れは感じます。

この世に生を受けた喜びを感じる事が出来る美という価値観に、我々は若い時に触れる環境に恵まれ、とても幸せだったと思います。次のジェネレーションにも是非受け継いでもらって、美という人類

が持っている最高の幸福感が伝わって行けばと願っています。

松本(梨) まとめになると思いますが、創造性と美について語っていただけますか。

坂口 創造力、創造性というのは生命力という事なのかもしれないですね。新しく自分を更新して時代を生きていく新しい力が、創造性の母体なのかもしれませんね。私達一人ひとりが高校時代に体験した美術部の活動から、社会に出て再びまた作品を持つて集まって来るという編み物の様な縦糸と横糸の様な関係でクラブが続いているという事が、創造性豊かな場と関係している。明日から修猷美術TOKYO展の15回展が始まりますが、その直前の座談会という事で、自分達の出発点と高校時代に皆といた時間、そして再び東京で集まって、今回も開催に漕ぎ着けるまでの共同した時間も、非常に貴重な時間を皆さんと共有出来たと思います。

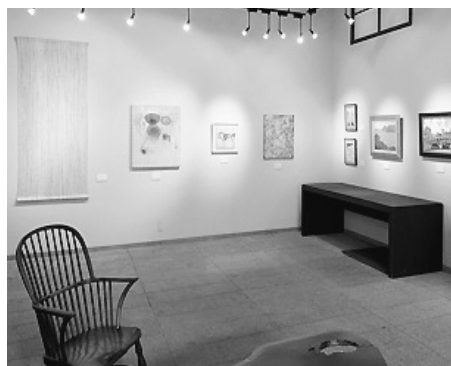
松本(梨) 創造力と生命力は、源を一つにしているという、素晴らしい結論が出たところで終了とさせていただきます。今日はどうも有難うございました。



東原 克行(昭和45年卒)

● 2008年の第1回展から、2022年の第15回展まで、出展された方々の卒年とお名前を列記します。

S 37 井上武、S 39 百田潤一、S 40 小松久美子(旧姓 宗)、S 41 永岡誠一郎、S 42 河原美比古、木村仁、中村正子(旧姓 堺)、S 43 坂口寛敏、武富ふき子(旧姓 米原)、高浜文子、坪田裕美(旧姓 賀来)、松本洋、渡邊和洋、S 44 伊佐裕五十川正伸、濱崎誠一、東慶太郎(故人)、S 45 伴野優美(旧姓 賀来)、東原克行、松本梨久子(旧姓 岩隈)、宮崎光二、S 46 岡本昌子、S 49 西條由紀夫、S 57 金岡健治、坂原祐樹、高取七絵(旧姓 木戸)、S 58 澤田隆一、S 60 船木美佳、S 62 内村直生、S 63 水崎玲、H 8 巖佐鈴奈



花盛り同窓会

同窓会総会報告

3年ぶりのリアル開催「GOGO集友」



平成5年卒 GOGO献会
実行委員長

岩 永 知 久
(平成5年卒)

令和4年度修猷館同窓会総会の幹事学年を務めさせていただきました。平成5年卒GOGO献会、実行委員長の岩永知久です。2022年5月28日(土) ホテルオークラ福岡様にて、3年ぶりとなる館友が一堂に会しての同窓会総会・懇親会を開催することが出来ました。

当日は、会場に約700名、オンラインで約130名の館友の皆様にご参加いただきました。

会を開催するにあたり、津田会長をはじめ同窓会役員の皆様、岡本館長をはじめ学校関係者の皆様、そしてキャラバン隊の受け入れや記念グッズの購入、広告協賛やチケット購入等、多大なるお力添えをいただきました館友の皆様に心より感謝申し上げます。

掲げた「GOGO集友」という総会テーマには、「どんな困

難が目の前に現れようともそれでも前へ！」というメッセージが込められております。

コロナ禍の自粛や規制の多い世の中で、約2年に亘る総会準備期間中、私も行き場のない不安感や焦燥感を感じることがありました。

この同窓会総会・懇親会が館友の皆様にとつて、前へ進む、未来へ向かう一步を踏み出すきっかけになっていただけましたら幸いに存じます。

準備期間中は、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置、福岡コロナ警報等、ほぼ何かしらの規制がかかり、同期で打合せを行うにも集まること自体が悪であるという風潮があり、困難を極めました。

思うように準備が進まずとも腐ることなくいつも前向きで、今日の前で出来ることを粛々と進めてくれたGOGO献会の仲間を大変心強く感じました。

総会当日は、コロナ禍にもかかわらず、約130名のGOGO献会の仲間が集まってくれました。国内遠方は勿論のこと、海外からわざわざこの総会のためだけに駆けつけてくれた仲間や、30年ぶりの再会を果たした仲間などもあり、久々の再会を皆で喜び合い、館友の皆様方をお迎えすることが出来ました。

また、同窓会役員会では特に幹事学年を経験された先輩方から、温かい応援と労いのお言葉、アドバイスを沢山頂戴いたしました。我々GOGO献会のリアル開催への思いを汲んでいただき、様々な方面への働きかけを行ってくださったと伺っております。懇親会の冒頭、新型コロナウイルスに翻弄された3世代、讃

猷会柴田先輩（H3卒）と朋猷会富安先輩（H4卒）と共に入場させていただき、ステージ上で共にトーチを掲げた際には、今までの諸先輩方が繋いできてくださった伝統を感じ、胸に熱いものがこみ上げてまいりました。

東京パラリンピック銅メダリスト瀬戸勇次郎選手の独占インタビューや同窓会新入生の令和4年卒の皆様方の運動会伝承会の様子など、館友の皆様方もお楽しみいただけたのではないのでしょうか。

規模も縮小、時間も短縮とコロナ前の懇親会のように盛大に行うことは出来ませんでした。ご参加いただいた館友の皆様方の感染拡大防止策へのご理解とご協力により、この時期としては考えられる最大規模で無事に終えることが出来ました。

会場の皆様方の表情からも同窓会総会・懇親会をどれだけ楽しみにしていたのかをうかがい知ることが出来、改めて修猷館同窓会の素晴らしい価値を感じることが出来ました。

翌日の修猷OBゴルフ大会も3年ぶりの開催ということで、多くの館友の方々にご援助いただきました。

総会・懇親会、ゴルフ大会と十分なおもてなしが出来なかったと思いますが、館友の皆様方の修猷愛・修猷魂に支えられた貴重な体験をさせていただきました。

総会・懇親会前日は、キャリアセミナーを開催いたしましたので、我々GO猷会にとっては怒涛の3日間でありましたが、準備期間を含め、同期の絆を深める良い機会をいただけたと感じております。今後同期の同窓会も更に盛り上がって行けると確信しております。

現在、入江実行委員長の下、六星会（H6卒）の皆様方が幹

事学年として、1,000人超の規模を目指し、次年度の同窓会総会・懇親会を準備して下さっています。

今回幹事学年として、館友の皆様方からいただいた沢山のご恩を、後に続く後輩の皆様方へお送りすることが出来るよう、GO猷会一同しっかりとバックアップしてまいります。

2023年5月26日（金）、修猷館同窓会総会・懇親会にて、皆様方とお会いできますことを心より楽しみにしております。この度は、誠にありがとうございました。

東京修猷会総会報告



吉田 貞信

（平成7年卒）

「とにかくたくさん集めて記録更新したいね」「なら、テーマは集える健児一千人やな」令和元（2019）年6月の東京修猷会の総会の後、幹事学年を翌々年に控えて無邪気に飲み語り合った時には、まさかこんな状況になるうとは想像だにしませんでした。

コロナ禍のなか集うことすらままならなかった2年間を経て、令和4年6月10日『集おう！健児一千人』つながる、つなげる修猷7G」と題し、西新宿のハイアットリージェンシー東京に

おいて東京修猷会総会を開催することができました。当初はコロナ禍以前のように皆で集まり、ワイワイガヤガヤと飲み語りあう場にしようと様々な準備を進めておりましたが、感染状況に対する見通しや対応の難しさや、ホテル側の営業縮小などが重なり、最終的には飲食なし150名限定で会場に集い、その模様をオンラインで配信するハイブリッド方式で実施することとなりました。これまでにないかたちでの運営方式で「宴会もなくてそもそも皆が参加してくれるだろうか」「せっかく来てもらった人たちを楽しませることができだろうか」等々不安もありましたが、結果的には当日の会場は満席、オンライン及びアーカイブ配信では350名超の方に視聴いただきました。

当日は恩師として、岡本圭吾館長、泉順子先生、金川文雄先生、古賀元博先生にお越しいただき、それぞれ、ときに熱く、ときに愉快にスピーチを頂戴いたしました。「前半の総会であんなに笑ったのは初めてかも」というお声も頂きました。

後半の学年企画では「宴会がなくても楽しめる企画を」ということで、70代から10代の現役生まで各世代を代表し7名の修猷健児にインタビュールームを行ってドキュメント形式の映像をまとめました。その他にも、恒例のオリジナルグッズ販売や新しくなった修猷グラウンドの人工芝を東京に空輸し会場に展示し、記念撮影ブースを設置したりと、わざわざ会場に足を運んでいただいた方にも楽しんでいただくための企画を準備しました。「酒がなくても楽しめた。」総会で初めて涙してしまいました。「どんなかたちであれ集まれてよかった!」と会場参加者はもとよりオンライン視聴した方々からもポジティブな言葉を多数頂き、苦勞と工夫を重ねた甲斐があったと、当日の打ち上げで

は幹事学年一同、朝方まで喜びの杯を重ねました。

幹事学年の七猷会メンバーがそれぞれ忙しい中で少しずつ時間や労力をやり繰りしながらも、それぞれの個性と才能を発揮することができたからこそ、後にも先にもない唯一無二の東京修猷総会ができたのではないかと自負しておりますが、少し時間が経って改めて振り返ってみて、幹事学年を温かく見守って頂きながらやりたいことやそのやり方を指導サポートしていただいた執行部の皆様や、突然の取材申し入れなどにも快諾いただき時間を割いてくれたOBや先生方、そして会に参加していただいた館友の皆様の力添えの大きさを改めて実感しています。

OBの方々のインタビュールのなかでも出てきた言葉ですが、そんな皆様から共通して感じられるのは、修猷に対する大いなる愛情、いわば「修猷愛」です。金銭のやりとりがあるわけでもなく、なんの利害関係があるわけでもなく、しかも年齢が何十と離れていたとしても、快く自分の時間を割いて同窓の先輩、後輩のために協力してくれる。これを「愛」と呼ばずして何と呼びましょうか。また逆説的かもしれませんが、そんな愛ある人たちが集い、交流するからこそ、修猷館という存在が固定化した思い出の記号ではなく、現在進行形で何かを生み出すものとしてイキイキと存在し得るのではないのでしょうか。意味や価値がより大事になる時代のなかで、そんな愛ある集団としての修猷館の意義はさらに高くなっていくように思います。社会情勢の変化などから今後の運営や会のあり方についても様々な課題が出てくるでしょうが、七猷会の仲間たちとともに今後を担う後輩たちをバックアップしながら、修猷愛溢れる人たちが集う場としての東京修猷会をさらに盛り上げていきたいと思えます。

集いし修猷健人―近畿修猷会総会報告―



学年幹事 讃猷会

後 藤 健 介

(平成3年卒)

秋も深まってきた11月5日土曜日、かつて近江商人の店で賑わっていた大阪市中央区安土町にあるヴィアーレ大阪の安土の間を会場とし、第47回近畿修猷会総会をリアル形式、オンライン形式のハイブリッド形式で開催することができました。例年どおりの形となる総会としては、実に3年ぶりの開催となりましたが、この総会は、先輩方、そして令和4年度幹事学年である讃猷会の熱き思いが込められた総会でした。

コロナ禍により、福岡や各支部で様々なイベントや総会が次々と中止、例年と異なる形での開催を強いられていた中、近畿修猷会においても、令和2年度、3年度の幹事学年の先輩方は、イベントや総会の準備を直前まで綿密にされ、しかしながら例年どおりに開催することができませんでした。そして、我々讃猷会も、3年前の福岡総会を幹事学年として代表の柴田君を筆頭に準備を進めたものの、直前で中止の決断を下し、悔し涙を流したのです。その先輩方の悔しい気持ち、我々讃猷会の今度こそ、という熱き思いを胸に、準備を進めさせていただきました。

した。今回も徐々に新型コロナウイルス感染者数が増えてきたため、懇親会を開催するか否かを9月13日の臨時世話人会にて決めることとなり、最終的に開催の決断をいただいたのです。先輩方、讃猷会の熱き思いが結実した時でした。

今回の総会・懇親会には、ご多忙にもかかわらず、ご来賓として、修猷館高等学校の岡本圭吾館長、修猷館同窓会の津田純嗣会長、大賀啓史幹事長、東京修猷会の伊藤哲朗会長、中京修猷会の川野靖史幹事長、関西福中・福高同窓会の岡部和也会長にお越しいただき、心温まる、そして激励のご挨拶も賜ることができました。心より感謝申し上げます。

総会は大竹代表世話人のソフト、かつスムーズな進行で全ての議題が議決され、予定よりも早く終えることができました。幹事学年として、世話人の先輩方が直前まで様々な情報やデータを整理され、資料を準備されていたのを目の当たりにしておりましたので、頭が下がる思いでしたし、大変勉強になりました。

総会の後は、讃猷会である我々の同期、高橋信也君（株式会社マネジメントソリューションズ代表取締役）による「どこでも役に立つプロジェクトマネジメント―家族旅行から、政府予算の執行まで―」というテーマでの特別講演でした。様々な視点から、プロジェクトをマネジメントしていくことの重要性、プロジェクトを成功に導くための準備や流れについて分かりやすく解説がなされ、参加者全員、大変興味深く聞き入っていました。同学年として、そして小学校からの友人として本当に誇らしく思いました。

特別講演の後には、懇親会です。コロナ禍ということもあり、館歌は音源を流しながらの黙唱となりました。乾杯の音頭は平知明先輩（昭和30年卒）にとつていただきました。そして、しばしの歓談の後、98歳になられた辰巳秀一先輩（昭和17年卒）の庄巻のピアノ演奏です。まさに魂が揺さぶられる独演で会場が熱気と感動に包まれました。あー、やはり修猷の先輩はすごいな、と改めて思った次第です。辰巳先輩、是非来年も魂の演奏、拝聴させていただきます。

ピアノ演奏の後には、近畿修猷会自慢のクラブ活動報告です。音楽を楽しむ会、爽筑会、円猷会、遊猷会、アートクラブ、釣りクラブ、与華燈会、ランニングサークル、でじたるしつとう会、詩吟クラブ、ツーリングクラブと10を超える各クラブからクラブの紹介と今年度の活動報告をしていただきました。どのクラブも活気があり、近畿修猷会らしい活動報告でした。

各クラブの活動報告で盛り上がった後、来年の福岡総会、東京総会について、六星会（平成6年卒）、平八会（平成8年卒）からそれぞれ元気一杯に紹介がありました。そしてこの後、我々讃猷会から朋猷会（平成4年卒）への年度幹事の引継ぎです。讃猷会代表の私から、朋友会代表の内藤君に館旗を手渡し、幹事学年をバトンタッチしました。実は内藤君は私の幼馴染です。高校卒業後は、なかなか会う機会もなくなっていました。このような形で再び連絡を取り合うようになり、まさに近畿修猷会が再び紡いでくれたわけです。内藤君を中心に、朋猷会の皆さんも一致団結しています。一緒に近畿修猷会を盛り上げて

いきましよう！

いよいよ会も閉会に近づき、会場の皆様、オンラインでの参加の皆様で「彼の群小」を黙唱し、我々讃猷会からエールを送らせていただきました。エールは、元応援部であり、福岡総会の代表であった柴田君を中心に、同じく元応援部である梅原君、徳田君を左右に、三人でのエールとなりました。柴田君は学ランを携え、福岡から駆けつけてくれました。三人のエールは、我々讃猷会からの熱き思いと、皆様のご健康とご多幸の願いが込められた、素晴らしい感動のエールでした。

以上、第47回近畿修猷会総会は、参加者約140名と成功裏に会を終えることができました。当日駆けつけてくださったご来賓の方々、一年間優しくサポートしてくださった大竹世話人代表をはじめ、世話人の先輩方、近年の年度幹事の先輩方には心より感謝申し上げます。また、柴田君、市原君を中心として福岡、東京、各地からの讃猷会メンバーの皆様、そして一年間、団結してともに取り組んできた近畿修猷会・讃猷会メンバーの皆様、本当に有難う！また、参加いただいた皆様、至らない点多々あったかと思いますが、総会・懇親会を経て、笑顔になっていたただけなのであれば幸いです。

皆様のお陰で、本当に心温まる総会・懇親会、「集いし修猷健人」の会であったと思います。誠に有難うございました。近畿修猷会への引き続きのご支援、何卒宜しくお願い申し上げます。

ゝ支部だよりゝ

東京修猷会

東京修猷会は、数ある支部の中でも歴史が古く、本部に次ぐ会員数を誇ります。最も特徴的な行事に毎月第二木曜日に学士会館で開催される「二本会（にもくかい）」があります。修猷の卒業生を講師に迎えた月例の講演会は今年で670回を超えました。昨年の講演内容は次のとおりです。（肩書、所属は講演時のもの）

1月「未来の雑誌はどんなカタチをしてるだろう？」

ゝペーパーレス時代の出版業ゝ

昭和61年卒 松原亨さん（マガジンハウス『コロカル』

編集長）

2月「日本漁業の復活を目指して！」

昭和56年卒 神谷崇さん（水産庁長官）

3月「アフター東京バラの今こそ知ろう！」

ゝ視覚障害とロービジョンケアゝ

昭和60年卒 清水朋美さん（視覚障がい国際クラシ

ファイア・眼科医）

4月「映画『なつやすみの巨匠』を製作して」

平成7年卒 入江信吾さん（脚本家）

※4月は毎年新入会員歓迎会として開催

5月「ウクライナ紛争と日本の防衛」

昭和46年卒 用田和仁さん（日本安全保障戦略研究所

上席研究員）

※6月は東京修猷会総会を開催

7月「SDGsと新富指標

ゝ豊かで持続可能な社会の実現を目指してゝ

平成6年卒 馬奈木俊介さん（九州大学主幹教授・

九州大学都市研究センター長・総長補佐）

9月サロン・ド・修猷「音色でつながるあの時あの場所」

※土曜午後に家族や友人も参加できる会として開催

10月「天神の杜に生きて」

昭和47年卒 西高辻信良さん（第39代太宰府天満宮宮

司・宝満宮竈門神社宮司）

11月「自立して歩き旅をしたい人の実践講座

ゝ国境なきSenior Wanderer 10年の足跡ゝ

昭和45年卒 坪内俊之さん

12月 ※忘年懇親会として開催

コロナ禍により、休会を余儀なくされた時期もありましたが、現在は会場参加とオンライン併用で開催しております。ご参加をお待ちしております。

幹事長 原沢 由美（昭和58年卒）

近畿修猷会

近畿修猷会では毎年、いくつかのイベントを行っており、他の支部同様、近畿修猷会もここ2年ほど新型コロナウイルス感染症の影響を受け、ほとんどのイベントが中止、あるいはオンラインや規模を縮小しての開催を余儀なくされていきました。しかし、今年度は社会全体が新型コロナウイルスになりつつある中、世話人会や近畿修猷会の先輩方の多大なるご尽力のお陰で、規模は若干縮小することがあったものの、無事にすべてのイベントを例年通り対面式で開催することができました。

特に対面での参加型イベントである春イベント、秋イベントは3年ぶり、ゴルフコンペは2年ぶりの開催となりました。春イベントは水都大阪をクルーズ船を貸切つての舟散歩、秋イベントは箕面の大滝を親に行つての温泉を企画させていただきました。ゴルフコンペでは、福岡から讃猷会メンバーも駆けつけてくれた中、皆さんハッスルされ楽しんでいただきました。総会も3年ぶりに例年通りの形で開催することができました（これに関しては、別途ご報告させていただきます）。

また、イベントではありませんが、毎年度2回発行している新聞も、会員の皆様から寄稿していただいたり、卒業生にインタビューに協力いただくなど、多くのご協力をいただいたお陰で、無事発行することができました。

この一年間、多くの貴重な経験を通して勉強させていただきました

ました。また修猷館の先輩方と密に接していただき、改めて修猷館の固い絆を感じました。心より感謝申し上げます。

後藤 健介（平成3年卒 讃猷会）

宮崎修猷会

令和3年度の宮崎修猷会年次総会および懇親会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で残念ながら中止となりました。令和3年8月には全国的な第5波の中で宮崎県でも感染が急激に拡大し、一時は落ち着いたのですが、令和4年1月には再び感染が拡大しました。総会を中止にしたのは苦渋の決断でしたが、今回ばかりは中止して間違いないかと感じました。このような感染状況のため、宮崎修猷会ではしばらく活動ができておりません。この原稿を書いている現在（令和4年10月末）ではようやく状況が落ち着いてきており、このまま状況が落ち着いて、令和5年1月には定例の年次総会および懇親会を開催し、来賓をお招きして会員の親交を深めることができることを願うばかりです。

宮崎修猷会は小規模な会ですが、アットホームな雰囲気集まりです。宮崎へ転入される館友の方は、是非、宮崎修猷会へご参加ください。お待ち申し上げております。

光田 靖（事務長・平成5年卒）

中京修猷会

中京修猷会では過去2年続けて新型コロナウイルスにより諸行事を中止せざるを得ませんでしたが、6月4日(土)に3年ぶりに総会を開催することができました。検温、マスク着用、着席／黙食での弁当喫食等制限の中での開催でしたが、同窓会本部から津田会長、高校から岡本館長、会員26名の出席を得て無事に開催することができました。議事では会報「猷交」の充実を目的に、規約に会報発行を追加することを提案し採択されました。「猷交」は行事報告や会員動向、母校の近況や活躍の紹介を行っており、コロナ禍の2年間では貴重なツールとして大活躍でした。参加者からは「3年ぶりに顔を合わせ嬉しかった」「やって良かった」という感想が聞け、人の繋がりの有難さを実感できました。

その他行事も徐々に復活、9月17日(土)に各務原市「航空宇宙博物館」を訪問、戦前の飛燕／零戦からYS-11、宇宙ステーションまで実機や貴重な展示物を拝見、楽しみました。

11月に嶋尾会長が「名古屋商工会議所会頭」に就任されました。中京地区は自動車や航空宇宙産業を始め製造業が盛んな土地で、産業振興の旗振り役としてのご活躍をお祈りします。中京修猷会としても大変名誉なことと受け止めています。

世の中はアフターコロナに向けて動き始めていますが、中京修猷会としても従来以上に多数の会員に参加していただけるよ

うな活動を行っていききたいと思っています。

川野 靖史(昭和54年卒)

大分修猷会

私が大分修猷会に初めて参加したのは2001年でした。一番若い参加者だったので緊張しましたが、温かく迎えてくださり元気になる会だったので毎年出席しています。

大分修猷会の特徴は少人数で会員同士や来賓との距離感が近いこと、後輩を大切にすることです。

館長先生や同窓会役員の方と話す機会が何度もあり、貴重なお話を伺えました。

大分修猷会の懇親会では、全員が自己紹介近況報告をします。必ず若手からするのが習わしです。話が長くなっても寛容ですが、大先輩ほど時間内に含蓄のある話をされます。

大分修猷会の1983年の発足から幹事だった井上会長は、「とにかく続ける事」をモットーに会を支えてこられました。盛会が続いていますが、私よりも若い人の出席が少ないのが悩みの種です。

大分県にお住まいの方や縁のある方はぜひ大分修猷会に参加してください。

連絡先 大分修猷会 幹事 布村 知丈(平成元年卒)

鹿児島修猷会

これまで長きにわたり鹿児島修猷会を会長としてご先導いただきました鹿児島大学名誉教授の吉村 望先輩（昭和27年卒）が、令和四年三月十一日にご逝去なされました。鹿児島修猷会では現役医師としての麻酔科・ペインクリニックの話題や奥様との海外旅行の思い出などを毎回お話ししていただいております。ご病気の療養とコロナ禍が重なりましてお会いすることは叶いませんでしたが、ご冥福を心からお祈りするばかりです。これまで本当にありがとうございました。心から御礼申し上げます。

なお、令和四年度からは次のメンバーにて鹿児島修猷会の活動を進めて参ります。

会長…福田 健夫（昭和28年卒）
副会長…飯田 泰雄（昭和36年卒）
幹事…三好 宣彰（昭和55年卒）
副幹事…富原 一哉（昭和58年卒）

鹿児島修猷会は毎年二月の第一土曜日に総会と懇親会を開催いたしております。ここ二年間は中止となつてしまいましたが、是非ともお気軽にご参加ください。また、転勤等で鹿児島に超越しになられた際にはご連絡をお願いいたします。

幹事 三好 宣彰（昭和55年卒）

東北修猷会

2020年は中止、2021年はリモート開催でしたが、2022年11月12日（土）に第10回東北修猷会定期総会を仙台ガーデンパレスホテルで対面にて行うことができました。

同窓会本部から大賀啓史常任幹事長、修猷館高校からは岡本圭吾館長先生にご出席いただき、同窓会本部について、学校へのサポート、修猷館高校の近況と現役生の様子をお話しいただきました。東北以外からの方も含め16名のご参加をいただきましたがコロナ禍のためご出席を断念された方もいらっしゃいました。このような折なので仕方ないことですが残念です。

懇親会では出納克彦前会長に乾杯のご発声をいただき、六星会3名による令和5年度同窓会総会開催PRとグッズ販売、その後、参加者の皆様から自己紹介や近況をお話いただきました。修猷館高校の飛梅から作られた梅酒（先に行われた昭和56卒還暦同窓会で私がいただいていた）を皆様に賞味いただくことができました。残りはいまだ来年の東北修猷会まで熟成いたします。今回は学生さんのご参加がありませんでしたが、お気軽にご参加いただければと思います。東北修猷会のブログやFacebookがありますので、いつでもご連絡いただければ嬉しいのです。

総会直後の11月14、16日に修猷館高校2年生の研修旅行（福島、宮城）があり村山知生さん（平成2年卒）が現役生に講演

を、また常任幹事の山本賢さん（平成28卒）が仙台空港でお見送りをしてくださいました。

最後に昨年より出納克彦前会長から引き継ぎ、工藤砂織（昭和56年卒）が会長を、山本文彦さん（昭和59年卒）が幹事長を務め、新たに3名の常任幹事に加わっていただきました。東北にいらつしやる館友の皆様、ご連絡をいただければ幸いです。

工藤 砂織（昭和56年卒）

中国四国修猷会

中国四国同窓会は、誠に残念ながら2022年も2020年・2021年に引き続き開催を断念せざるを得ませんでした。

その間は館友同士の絆を絶やさないために、Facebookの修猷館同窓生サイトに掲載されたトピックスの中から適宜メールアドレスを登録している会員（約80名）にメール配信しました（2021年は20通）。主な内容は以下の通りです。

①運動会・十里行軍等の学校行事の模様 ②ラグビー部・柔道部等の現役生の部活での活躍の様子 ③母校・館友が出演するテレビ番組の案内——等々

2023年の総会の予定は次の通りです。域外からの参加も大歓迎です。

日程…2023年6月24日（土）17時30分～20時00分

場所…広島グランドインテリジェントホテル（広島駅在来線

口より徒歩5分）<https://intelligent-hotel.co.jp/grand/>

会長 河野 浩（昭和46年卒）

北九州修猷会

北九州修猷会は令和4年11月11日（金）に修猷館高校から岡本圭吾館長、同窓会本部から、西高辻信良副会長、中本純徳事務局長をお迎えし、西小倉にあるTHE STEEL HOUSEにて第20回北九州修猷会を開催いたしました。

コロナ禍もあり3年振りの開催となった本年は、幅広い年代の56名の館友の皆様にお集まりいただきました。津田純嗣修猷館同窓会会長 兼 北九州修猷会会長（昭和44年卒）の開会挨拶でスタートした総会では、西高辻副会長、中本事務局長にご挨拶をいただきました。そして、岡本館長に修猷館の現状についてお話をいただきました。久しぶりに開催された大運動会の模様のご紹介や、修猷文化についてのお話に皆様熱心に耳を傾けておられました。

恒例の卓話では北九州市立大学の松尾太加志学長（昭和51年卒）に「北九州市立大学の今」という演題でお話をいただきました。国際交流の取り組みや研究の成果などについてお話いた

だき、皆さん大変興味深く聞き入っておられました。

総会に引き続き、平田晴夫先輩（昭和32年卒）の乾杯のご発声によりスタートした懇親会は、至るところで歓談の輪ができ、また次回大同窓会幹事学年の六星会の皆様（平成6年卒）による記念グッズ販売も大盛況で2時間という時間があっという間に過ぎてしまいました。

次回の北九州修猷会は2年後の令和6年開催を予定しております。北九州修猷会は同窓会事務局より北九州とその近郊に住まいの方々をご連絡いただき、ご案内を差し上げておりますが、次回も多くの皆様のご参加をお待ち申し上げております。

高松 雄太（平成5年卒）

長崎修猷会

長崎修猷会は、令和元年以来3年ぶりとなる第47回総会を、ご来賓の岡本圭吾館長（S56卒）、大賀啓史常任幹事長（S46卒）、令和5年度同窓会総会幹事「六星会」の皆さんを含む総勢32名で、12月10日（土）午後5時から新地中華街「新和楼」にて開催しました。

恒例に従い総会冒頭では、(株)JR長崎シティ取締役総務部長の太田周作様（H5卒）より『西九州新幹線開業と長崎駅周辺のまちづくりへの取り組みについて』とのテーマで、長崎新幹

線開業が長崎に及ぼす経済効果や、100年に1度と言われる長崎駅周辺の再開発の概要を、公表されていないトピックスを織り交ぜてご講話いただき、参加者一同興味深く拝聴しました。引き続き、中牟田真一長崎修猷会会長（S41卒）、岡本館長、大賀幹事長からご挨拶と母校の近況報告、大熊稔幸長崎修猷会幹事長（S50卒）の経過報告の後、参加者全員で記念撮影を行いました。

総会後半の懇親会は、元会長で今回の参加者中、最年長（御年94才！）の西醇夫さん（S22卒）から、修猷館への熱い思いと共に、乾杯のご発声を頂き、開宴。

懇談の中では、六星会の皆さんから令和5年度総会のご案内と記念グッズのお披露目、岡本館長のご紹介による2022年修猷大運動会のビデオ上映、参加者からご提供いただいたお品、食事券などが当たる恒例の福引抽選会などが行われました。

最後は、館歌斉唱の後、矢野右人さん（S30卒）の音頭で万歳三唱し、盛会のうちに開きとなりました。

これからも長崎修猷会は、学生から大先輩まで幅広く、そして和やかに交流いただけるよう、盛り上げて参りたいと思います。

宮下 武彦（昭和60年卒）
立石 修（昭和62年卒）

沖縄修猷会

新型コロナウイルス感染症パンデミックも本年度4年目となりました。これまでの3年間は、沖縄県からの自粛要請を受けて沖縄修猷会総会・懇親会の対面開催を控えていただいております。昨年5月に対面開催された本部総会懇親会後に、全国で急激に感染者が増加し、11月の対面開催も危ぶまれる状況でした。幸い、一時は全国ワーストだった沖縄県の感染者数も、第8波の兆候が見られた10月には全国最小のランクに落ちつき、めでたく対面での開催を実施することができました。3年ぶりとなりました第18回沖縄修猷会総会・懇親会には、これまで通り、県内在住会員に加えて県外会員の御参加も頂きました。同窓会本部からは、大賀啓史常任幹事長、修猷館高校からは、眞鍋健治先生の御参加をいただきました。また、同窓会総会幹事学年の六星会（平成6年卒）からは、実行委員長の入江耕平氏を始め、キャラバン隊の石田英子氏、東幸恵氏も御参加いただき、会を大いに盛り上げていただきました。御陰様で、小人数ながら暖かい南の島で熱い館友交流を持つことができました。沖縄在住・非在住に関わりなく、「緩い」沖縄修猷会に御興味のある方、11月に沖縄旅行をご計画の方々は、是非とも一報をお願い致します。一見さんも歓迎いたします。

山崎 秀雄（昭和55年卒）



東北修猷会



中京修猷会



長崎修猷会



北九州修猷会



沖縄修猷会

〓周年行事〓

三年ぶりの同窓会〓そして修猷への想い



学年幹事代表

入 江 正 徳

(昭和33年生)

昨年十一月十九日、令和元年以来三年ぶりの同窓会を福岡市中央区の福新楼で開催した。新型コロナウイルスの感染で、今まで毎年開いていた同窓会が二年間開けず、三年ぶりの会となった。ただ感染者が中々減少しなかったため、福岡以外の遠隔地からの参加は難しいと思われたため、福岡県を中心とした近場の者だけ約五拾名の参加希望があったが、その後年齢のためか、体調不良を原因とした欠席が相つぎ、最後は四拾貳名の参加となった。

最初に集合写真を取り、その後、陣川副会長の司会により始まり、その後遠くから来てくれた貫君の講話を拝聴し宴会が始まった。この二年間のブランクの影響は大きく、その間に亡くなった住所が変わったりして、かなりの郵便の返送があり、折からの郵政民営化のためか郵便の配送には大変手間取った。

その後、遠くから参加した安田君(大津市)、寺畑君(神戸市)、大濱さん(東京都)、松岡君(新居浜市)らが次々にその

近況を報告してくれた。また、この二十年の長きにわたって同窓会の案内状を作成し発送してくれた浦君の労を多とし、参加者一同その謝意をあらわした。

ただ、今回気が付いたことは、年をとってからの数年は時間の経過が早く感じられ今後五年程後の卒業七〇周年の同窓会を五年早めて六拾五周年に変更し、今年春開業予定の旧大名小学校跡地の新しい「ザ・リッツ・カールトン福岡」で前倒しで開催することを決定し、三月に開催する幹事会でその詳細を決めることに相成った。

今回のコロナの影響で外出が制限されたためか、同級生で定年退職後よく外へ出ていた者が家の中にこもりきりで外へ出ないためか足腰が想像以上に衰え、体調不良に陥る者が増加してびっくりした。

私共の昭和33年卒業のさんざん会は、当初、松井君が非常に熱心で長い間皆をひっぱってくれたが病のため早逝し、次の権藤君も地元西日本新聞社を退職後はよくリードしてくれたが一昨年亡くなり、その後は永く仕事を続けてきた私だけが生き残り、皆の御世話をする事となった。

修猷を卒業して六拾余年が過ぎ去り最近思うことは、いわゆる「修猷病」になる人が意外と多く、それがその後のその人の人生を大きく変えているという現実です。前記の式名の代表は修猷が好きで好きでたまらないという同級生でしたが、従来からのんぼりの私は特別に修猷を意識することはなく、今まで学んできた小学校や中学校の公立学校と同じと思っており修猷を特別に意識することはなく、ただ「自主独立の精神」だけは学

んだような気がします。ただ当時は男子の数が多く、女子はせいぜい拾五パーセントぐらいしかおらず、全部で八クラスの中で女子がいるのは三クラスぐらいで、残りは全て男子ばかりで「男子校の様な雰囲気」でした。ところが三年程前、私の孫の一人が修猷に入学し、その秋、運動会に行ったが男子と女子がほぼ半数ずつで、四つのブロックに分かれた応援合戦で一つのブロックは女生徒がブロック長で皆をとりきつていたのにはビックリしました。ただこの事実は現在の人口比で男女がほぼ同数であることを考えるとごく当たり前のことだと思われれます。ただ前に言った「修猷病」は私共の仲間にも多く、当時の国立大学へ進学出来た者の一部や九大には入学出来たものの卒業時に九大の教授にはなれず、そのほかの医科大学へ心ならずも在任せざるを得ず、その後何回もひらかれる同窓会には一回も出席することがなく、その後音信が途絶える人が多いのも気になります。また東大には毎年式拾数名が合格し、喜んでいたものの入学式で参千余名の入学者がいるのにびっくりして東大在学中には「ただの人」となり、その後の人生も特別なものにはならず、ただ「普通の人」となり今も同窓会には出てこない人も多い現実です。この事実は東京の早稲田や慶応でも同様でおよそ五千人ぐらい入学しているため、その数に驚き東京に埋没してしまう人も多いのが現実です。

私の身のまわりにも、東京の大学へ進む孫たちも多い現実を見ると今後の修猷像がどうなっていくか気がかりです。

卒業55+2周年記念行事実施奮闘記



東京しつとう会幹事長

由良 範 泰

(昭和40年卒)

品川駅にて

令和4(2022)年11月4日(金) 午前11時JR品川駅(東京)アトレ港南口にてしつとう会会員52名集合。全行程2泊3日「卒業55+2周年記念行事」の始まりでした。当日は、晴(快晴に非ず)、暑くも寒くもない天気でした。

何故「55+2周年」という中途半端な年次にイベントを行うのか、コロナ禍が治まったとは言い難い時期に開催して大丈夫か、そもそも「しつとう会」なる種族は何者か等々の疑問を抱かれる方がおられるかもしれません。

しつとう会とは

昭和40(1965)年卒生は、40をもじって「しつとう会」を同窓会組織としています。甚だ分かり易い名称です。その大半は、昭和21(1946)年生まれですので、現在概ね75〜76歳です。

昭和21年は終戦の翌年です。昭和22年から24年生まれの「団

塊の世代」に先立つ人口急増の先兵でした。

今でも中学教師の言った言葉が忘れられません。「お前ら数が多いすぎる。このままでは国が持たない。半分くらい殺さないかん。」戦地帰りの人が言うのですから迫力がありました。

その我々が小学校・中学校で教わったことには「上の人の言うことを鵜呑みにするな。」というのがあります。いわゆる戦後民主教育の一環で、盲目的に無謀な戦争に邁進したことに對する反省から来たのでしょうか。良くとれば自分の頭で考えろということでしょうが、下手すると目上の人の言うことは信用するなというようにとられます。我々の大半が後者のようにとらえたようです。

そのような状況で修猷館に入学しました。卒業後、はるかな後年先輩方に言われました。お前らは先輩を先輩と思わぬとんでもない面々だった、何という奴らが入学してきたのだと思っただぞ等々散々でした。

周年事業の準備

先輩方の覚えがめでたくない反面同期相互の絆は固く、同総会活動は盛んです。

卒業20周年、30周年、40周年更には50周年の各記念行事を福岡においてしつとう会本部主催で、合間の35周年を関西において近畿しつとう会主催で実施してきています。

これらは、全て全国の同窓生に声をかけて実施してきたものです。しかるに東京しつとう会は未だかつてこのような行事を

主催してきませんでした。

そこで、50周年記念行事の開催時（2015年）に55周年記念行事は、東京しつとう会が主催しますと小生が宣言致しました。もとより突発的ではなく、数人の同志と示し合わせた上でのことです。

思い起こすとこれが苦難の始まりでした。先ず、幹事を募って幹事会を結成しました。最終的には次のとおりです（敬称略）。青砥 宏、井上 浩（副幹事長）、宇野 栄、小南憲二、斉田秀実、齊藤穰二、佐貫恵吉、棚町精子、遠山昌利、原田智子、森 久そして小生由良の12名です。

次に、行事として何を行うか討議しました。箱根へ行く、墨田川舟での上り下り、上野の美術館・博物館巡り等々を討議しました。遠来の客、特に福岡の人に東京まで来てもらって西に戻るような遠出は控えるべきだ、東京の東京らしさに焦点を当ててはどうか、オリンピックが開催されるのだからその施設は見せたい、オリンピックとして花火大会を組み込むのは良いのではないか…。

で結局次のとおりとなりました。

- ① 大懇親会を行う。
- ② オリன்பピック施設、東京タワー（その後SHIBUYA SKY（渋谷スカイ）に変更）、皇居及び国会を案内する。
- ③ オプションとして土浦花火大会、JAXA（宇宙航空研究開発機構）等を加える。
- ④ 移動はバスを主体とする。

- ⑤ 行程を織り込んだ葉を作成し、配布する。
- ⑥ 写真撮影を適宜行い、行事終了後参加者に届くようにする。
- ⑦ 会員への連絡は、当初は手紙とするが、メールアドレスを聞き出し、次回以降はメール連絡を主体とする。
- 概ね3月に2回程度会議室を借りて幹事会を開催してきました。

新型コロナウイルスの蔓延と対応

令和元（2019）年12月中国武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に全世界へ蔓延しました。20世紀初めのスペイン風邪以来のパンデミックとなったのです。現在までに8波に亘る流行を繰り返し、未だに収束しておりません。

2020年に55周年記念行事を予定していた我々にとっては、想定外の事態でした。如何に対応すべきか討議を重ねた結果、次のとおりとなりました。

① 記念行事実施の再度の延期と決行決定

感染リスク要因の三密（密集・密接・密閉）を避けるため、実施を延期しました。2020年を2021年に、2021年を2022年にと2回延期しました。

2022年10月初め段階でもコロナは収束していませんでしたが、幹事会で決行することを最終決定しました。コロナワクチンが相当程度普及していること、感染第7波が弱まってきたこと、感染防止のノウハウに会員は相当程度習熟してきていること等によるものです。加えて我々幹事自体が

76歳前後でこれ以上の延期は身体的に持たないかという事情がありました。

さすがに「卒業55周年記念行事」とするわけにいかず、2年延期が見て取れるように「卒業55+2周年記念行事」と表示しました。

② コロナ禍に伴う障害とその対策

幹事会の打合せ自体を面談からWEB会議方式に替え、この方式だけでも延べ20回は開催しました。1回120分です戸惑いが当初ありましたが、全員習熟し効率よく討議できました。

困惑したのは、参観予定の施設の多くが、参観人数の制限、紹介者を通すことの要求、ワクチン接種済みの証明提示等ハードルが上がったことです。なかでも次の2つには大きな制約がありました。

イ 皇居

「団体予約は、前月1日の午前5時のWEB受付による、定員は50名とする。」

そこで、幹事3名が49名分を手分けして10月1日午前5時に一斉に申し込んだのですが、エントリーできたのは幹事1名で12名分のみ申し込めました。他は全国からの一斉申込ではじき出されたのです。これらは、人数制限のない東御苑と赤坂迎賓館に参観を変更しました。

ロ 国会（衆議院）

「団体予約は、議員の紹介を必要とする。1議員の紹介

人数は20名に限る。」

そこで、会員に縁のある5人の議員に紹介を御願ひして参観することができました。御願ひの過程である議員には4日の昼食を議員会館の中で摂らせていただくという便宜を図っていただきました。お陰で大変得がたい体験を致しました。

周年記念行事の実施結果

冒頭の11月4日品川駅集合から始まって6日の土浦駅解散までの行程とその参加者数は次のとおりです。これには夫婦同伴者を含んでいます。

【4日（金）】

① 衆議院議員会館内昼食、渋谷スカイからの展望、新国立競技場内部参観 52名

② ホテルにおける大懇親会（スライドによる思い出紹介、有志合唱、名曲放送、館歌斉唱等） 81名

【5日（土）】

③ 皇居・東御苑・赤坂迎賓館、国会（衆議院）参観 48名
「メイインイベント終了。東京駅で解散。引き続きオプショ
ンへ移行」

④ 土浦花火大会 38名

【6日（日）】

⑤ JAXA・予科練平和記念館参観 36名
「全行程終了。土浦駅で解散」

結論から言うと全て良好であったと感じております。物故者と行方不明者を除く350名余のうち80名近い参加者がありました。参加率は、概ね20%です。

天気には恵まれました。3日間晴れで気温もまずまずで強い風もほとんどありませんでした。渋谷スカイからの眺望、新国立競技場の内部、土浦花火大会は実に素晴らしく楽しめました。遅延者は出ていません。航空機の延着、都内周辺の電車の遅延も無く、4日に時間までに全員が集合したことは、驚きでした。その後も脱落者や病人が出なかったことは有り難いことでした。

しつとう会本部（川村啓造代表幹事）の支援によって、本行事の周知と案内状の発送を推進していただきました。近畿しつとう会（松川雅典会長）には同様に周知を図っていただきました。

幹事各位は、幹事会で作成した行動マニュアル、スケジュール及び班別名簿を駆使して各人の任務を正確に果たしていただきました。参加者のなかには、時間管理の正確さに驚いていた人がいたほどです。

結果的には、喜寿を迎えての、しかもコロナ禍の第7波と第8波の狭間で記念行事を実施したことになりました。今は、7年前の約束を無事に果たせたことで安堵しているところです。

4649会修猷館入学50周年記念同窓会&

修猷館見学ツアー『西九州を巡る旅』 開催報告



実行委員長

緒方 龍
(昭和49年卒)

私たち4649会は去る令和4年6月4日(土)から6日(月)にかけて、修猷館高校入学50周年記念同窓会&修猷館見学ツアー『西九州を巡る旅』と銘打って、学年同窓会と第3回目の修学旅行を実施しました。

前回、2016年に行われました第2回目の修学旅行「富士山修遊の旅」から6年を経ての開催でした。当初は前回が還暦を祝う意味も兼ねた旅行でしたので第3回は私たちが65歳を迎える年に実施しようという計画で進めていました。それゆえ、最初の準備のための実行委員会を開催したのは2019年のことでした。しかしながらご承知の通り、その年の年末からの新型コロナウイルス感染症の蔓延により、開催の延期を余儀なくされました。今回も決して新型コロナウイルスが終息したわけではありませんでしたが、入学50周年の節目でもあるので感染対策に十分気を付けて実施しようという事で実行委員の意見が一致し、最初の実行委員会から足掛け4年の時を経て集合しての開催をすることが

出来ました。

さて、3日間の報告です。

【第1日】6月4日(土)

初日は修猷館の見学からスタートしました。参加は希望者のみでしたが、午後2時に正門前に集合し、可動式の観覧席がある講堂、公立高校としては珍しい人工芝のグラウンド、資料館等を見学しました。校内に昔の面影は部分的にしか残っておらず、なつかしさに浸るというよりも現役の館友たちがうらやましいと思えるひと時でした。

その後、同窓会会場である「アゴーラ福岡山の上ホテル」に移動して、午後6時より学年同窓会を開催しました。案内を出す時には何名の参加者があるだろうか心配していましたが、いざ、ふたを開けてみると72名もの同窓生が集まってくれました。コロナ感染防止のためテーブルの人数を制限されるなどやや窮屈な点はありませんでしたが、久々の顔を合わせての同窓会、卒業以来初めて参加する者や今回も米国在住の山田哲義君がはるばる参加してくれたりと、久しぶりの再会を皆で喜ぶことが出来ました。

会の進行は、小柳有美さんを中心とした女性実行委員による開会の口上に始まり、実行委員長挨拶、副実行委員長の山本二郎君による乾杯と順調に進んでいきました。

メインは参加者全員の近況報告です。1組から10組までのクラスごとに壇上に登り、それぞれ順番に報告するという形をとりました。72名ですので一人30秒という時間制限を設け、時間

が来たらベルで合図をすることにして時間厳守でお願いしました。久しぶりなので皆の話が長くなり、予定が狂うのではと心配しましたが、ベルを無視して話す者や10秒で終わる者と現役時代の個性そのままに様々な報告があり、終わってみれば予定の時間内に収まるという結果になり、ほっとしました。

その後、余興として実行委員の大坂恒子さんがTVでお馴染みのちこちゃんに扮し、「一番遠くから来た人は？」等の色々な質問を参加者全員に投げかけ、不正解者には叱りまくり笑いを誘い、場を盛り上げてくれました。このように和やかに会は進み、最後は時節柄会場に館歌を流し、参加者は心の中で斉唱するという形をとりました。実行委員の内田潔孝君の閉会の挨拶があり、別れを惜しみながら、又の再会を約束し散会しました。

【第2日】6月5日（日）

この日からは第3回目の修学旅行です。旅行には34名が参加しました。山の上ホテルを出発し博多駅からの参加者をピックアップして最初の目的地、佐賀県立名護屋城博物館を目指しました。ここは豊臣秀吉の朝鮮出兵の拠点となった名護屋城跡近くに建てられた博物館で、黄金の茶室を再現した展示等があり当時の様子を知ることが出来ました。

昼食は名物呼子のイカを堪能しました。現地で食べるイカの味は格別でしたが唯一の心残りは団体で申し込んだので姿づくりではなく、大皿にイカが盛り付けられていたことでした。関東関西からの参加者も多かったので何とかと思いましたが、お店が対応できないとの事で残念でした。

午後は唐津おくんちで有名な曳山を見学した後、有田焼における佐賀鍋島藩の御用窯として知られる、秘窯の里「大川内山」で窯元を散策しました。あいにくの雨模様でしたが、それなりの風情が感じられ、見学とショッピングを楽しみました。

宿泊は嬉野温泉の老舗旅館「大正屋」です。日本三大美人の湯として有名なお湯に浸かり、すっかり美男女となった参加者は、宴会で1日目とは異なる和風懐石風の料理に舌鼓を打って大いに盛り上がりました。

【第3日】6月6日（月）

旅行2日目は本旅行のメインである西海国立公園の一角を占める九十九島の観光から始まりました。佐世保の鹿子前にあるパールシーリゾートから遊覧船「みらい」に乗船し九十九島の風光明媚な景観に触れ心が洗われました。この日は幸い天候も回復し、遠方からの参加者も久々の九州の自然を感じてくれたと思います。お昼は海から一転、弓張岳の展望台近くにある弓張の丘ホテルで、山からの絶景を満喫しながらのバイキング料理を楽しみました。抜群のロケーションに皆、満足してくれたようでした。

昼食後は今回の旅行の最終目的地である海上自衛隊の佐世保資料館セイルタワーの見学を行いました。旧日本海軍の歴史資料から最新の海上自衛隊の装備の紹介等、海軍の歴史を通して日本の近代化の歴史を学ぶことが出来る資料館で、大いに勉強になりました。

見学を終えると一路、福岡空港を経由して博多駅へと向かう

帰途につきました。1泊2日という短い旅行ではありましたが、参加者それぞれが行く先々で十分に楽しんでいただいたという雰囲気を感じられ、最後の博多駅で解散するときに参加者全員から「楽しかったありがとう」と「又、次も集まろうね」という声をかけていただき、企画した私たち実行委員にとってはとてもうれしく、満足のいく旅だったと思います。

そうそう、次の集まりですが旅行1日目の大正屋の宴席で次の実行委員長が決まりました。何と前回の「富士山修遊の旅」で実行委員長を務めた井手富士夫君の再登板です。前回の旅が素晴らしかったこともあり、皆が再登板を熱望した結果です。開催時期については古希記念旅行というような声も聞かれていましたが、井手君、よろしく願います。

最後にこれまで一緒に企画運営に携わっていただいた実行委員の皆さん、特に山本二郎君、小柳有美さん、内田潔孝君、高嶋好夫君には大変お世話になりました。深甚より感謝の意を表します。本当にありがとうございます。

同窓生の皆、又、会おうぜ。

それまで元気にしときんしゃい!!

「あがり!」なき『すごろく』

〜還暦記念同窓会



すごろく会 常任幹事

佐伯 拓史

(昭和56年卒)

人生は『すごろく』に例えられることがある。人生で起きた出来事や転機、喜怒哀楽をつなぐと『すごろく』のようになるということだと思う。

修猷館での多感な三年間、共に学び、汗し、喜びや悲しみを分かち合った私たちも、卒業から四十余年、それぞれに人生の『すごろく』を進めて来た。そして、迎えたメモリアルイヤー。同じコマで一緒になるチャンスが到来した。

令和四年十月九日と十日の二日間、還暦記念の同窓会を開催した。懇親会には、全国各地から約百六十名の同級生が集まり、二次会の参加率も八割を越えてホテルを慌てさせた。この年齢になり、息が上がることはあっても、意気が揚がることなんてないかなと思っていたが、「久しぶり!」から「またね!」まで一分一秒の無駄もないほど話は尽きることなく、満面の笑顔に溢れた。人生六十年の節目に、ご褒美を頂いたように思う。

★すごろく会還暦同窓会★

(第一日) 懇親会+プレイベント①「すごろく相乗りバス」+

プレイベント②「闘魂杯ゴルフコンペ」

(第二日) 学校見学会

「還暦の同窓会どうするや?」は、同窓会総会幹事を務めた十年ほど前から大きなテーマだった。「旅行はどうや」「どうせなら積み立ててハワイに行かんや」と…夢と妄想を重ねていたところに、新型コロナウイルス。出現から三年目とは言え、未だ多くのイベント、集まりが中止や延期になっている中、どうするか?迷ったが、「博多どんたく」と「同窓会総会」の三年ぶり開催の決定を聞き、腹を決めた。修猷館の先輩後輩諸士の「動かすぞ!」という強い思いに背中を押していただいたように思う。

学年幹事らが世話役となり、多くの同級生の協力を得ながら準備を進めた。閃きと思い付き、挑戦と失敗、一か八か逆転、一回休み…正に『すごろく』のような半年間だった。

準備を通して感じたのは、同級生の多士済々ぶりだ。閃きやトラブルの多くは、同級生が長年積み上げて来た仕事の経験・特技を活かしたサポートで、ほぼ完全に実現、解決できた。

メールやSNSでの出欠確認では、IT系トラブルに幾度も悩まされたが、原因究明から対処まで手厚いサポートを得た。懇親会で、ホテルの担当者も聞き入るほどのJAZZ演奏を披露してくれた「SUGOROKU・BAND」は、開催まで一カ月の思い付きで始まったが、各地に散らばるメンバー集め

から終始リモート主体の準備で、本番に臨んでもらった。

遠来の同級生に福岡愛を呼び覚ましてもらおうと企画された「すごろく相乗りバス」(当日限定チャーターバス)も、旅行業界で活躍して来た同級生の経験が生かされた。

懇親会翌日の学校見学会では、修猷館出身としては二十二年ぶり二人目、第三十三代館長となった岡本圭吾君はじめ母校で教鞭を執る同級生四人に案内をしてもらおうという幸運を得た。平成二十八年にリニューアルした資料館も見学させていただいた。同窓会の資料館運営委員会の皆様には、資料の燻蒸・展示替えという大切な作業の日程調整をしていただき、そのお陰で、修猷館の歴史・文化の一端に触れることができた。

懇親会で撮影した全体写真を見ながら、そうした一つ一つがつながって、「すごろく会」の大切な一枚が完成したと思う。

人生百年時代。私たちの『すごろく』には、「あがり!」がない。次の大きな一コマである「卒業五十年記念」に向けて、夢の続きを楽しみたいと思う。

還暦同窓会の二日間が終わった夜、世話役を務めた学年幹事から「すごろく会」メーリングリストに発信されたメールが、私たちの気持ちを言い尽くしている。同級生とご協力を頂いたすべての方々に感謝の気持ちを込めて。

『月の綺麗な夜に…』 (十月十一日零時四十五分発信)

まさに夢のような二日間でした……

何故か今頃になって涙が止まらず
十八歳の時の運動会の翌日みたいな
達成感と喪失感とが肩を並べて
座り込んでいる気持ちです
本当に本当に本当に

懇親会と学校見学会に
参加してくれた人はもちろん
参加が果たせなかった人も

皆さんありがとうございました

あなた達とあの三年間を
一緒に過ごすことが出来て
心より感謝致します

次は卒業五十周年記念旅行やけん
頑張つてあと八年生きていかなばい

(了)



しつとう会



さんざん会



すごろく会



4649会

学年一口連絡アンテナ

【昭和29年卒】 六八会の皆さん元気ですか。コロナは少しずつ落ち着いて来ている様ですが。R5年春には、私達の、夏も近づく八十八の会として、実施したいと思っています。諸兄姉にはコロナやインフルに負けずに御身を大切に!!昨年一年間に、水口、大原、藤井、檜原、磯、門田(相羽)、奏(重富)の諸兄姉が旅立ちました。黙祷

岡村 祥三

【昭和32年卒】 二日市温泉・大丸別荘での最後の大会から五年半。三三会福岡(大村哲也代表)はコロナを掻いぐぐって毎月第三木曜日の例会を続けている。一昨年十一月は、故・松岡龍男君の一周忌墓参で来福した平野熙幸・東京、岡部弘・大阪の両代表ら四人も加わり総勢十八名(うち女性四人)が市中心のホテルに集いボジョレ・ヌーボーで交歓した。

武藤 侑

【昭和38年卒】 十五年に亘って年4回(季刊)発行してきた文集「百道原」を昨年1月の第58号をもって終刊としました。「百道原」は、福岡市総合図書館の郷土史コーナー最前列に展示され、いつも表紙に折り目がついていて読まれていることが明らかでした。一年ほど前展示のお礼に図書館を訪問した際、学芸員の方が「いつも楽しく読ませていただいています」と言っておられ、編集者としては、文集が少しでも影響力を発揮できるよう努めていましたので、その言葉にほっとさせられました。

「さんばち会」は本年卒業六十周年を迎え、5月に記念の同

窓会を開催します。

中村 彰秀

【昭和44年卒】 コロナ禍の中で、獅子の会例会を中断していましたが、令和5年から再開します。

基本は奇数月の第一土曜日に福岡市天神の『天神芙蓉』さんで、夕方17時半頃からの開催です。

開催前に、善敏治君からメールで案内しますので、参加される方は返事をお願いします。

メールが来ていない方は、メールアドレスを麻生俊郎宛(連絡先は「学年一口アンテナ 連絡先」を参照)までお知らせください。

麻生 俊郎

【昭和45年卒】 昨年の同窓会総会には十数名の出席、その後の二次会には飛び入りも含め40名ほどの同期が集まり久しぶりの再会に大いに盛り上がりました。

今年もホテルニューオータニ博多での同窓会総会(5月26日)・総会後の45会同窓会にも是非多数のご参加をお待ちしています。

学年同窓会等様々な連絡は45会MLからお届けしています。本年もよろしく願いいたします。

森下 七百枝

【昭和49年卒】 昨年の6月には、コロナで延期になっていた西九州の同窓会ツアーを敢行することができました。唐津周りのコースで「唐津、大川内山、伊万里、有田、九十九島、佐世保」の旅には前夜祭も加えれば約1000人の参加を得、素晴らしい

同窓の思い出となりました。幸いにもその後の感染も無く元気に今を迎えております。又、この時期にすっかり馴染んだオンラインの「4649会飲み会」もあちこちで楽しく続いています。ちよつとイケてる67歳の仲間です。

小柳 有美

【昭和50年卒】 五輪会の皆さん、元氣にお過ごしですか？

昨年、11月12日（土）に、修猷館入学50周年を記念して、3年ぶりに同窓会を開催しました。東京から駆けつけてくれた同窓生もあり、参集してくれた同窓生に改めて感謝をいたします。65才を過ぎ、自営業を除き時間的にも余裕ができた同窓も増えてきており、美術館巡りの旅や野菜作り、音楽活動、ボランティア等々と活動領域は、ますます広がってきているようです。同窓会の翌日は、恒例の五輪会ゴルフ大会も開催されました。スコアはともかく、皆さん、口と同様に体もまだまだ、健康でよく動くようです。

3年後は、修猷館卒業50周年です。今回の同窓会はコロナもあり、遠慮気味の声かけでしたが、卒業50周年記念同窓会には盛大に集まりました（なお、今年も同窓会は、11月の第2土曜日に開催予定です）。

それでは、お元気で。

五輪会 伊東

【昭和52年卒】 還暦同窓会を機に「ごじゆうに会」の新ホームページを開設しています。「掲示板」「写真館」「資料館」など盛りだくさんな内容ですが、メインはメンバー一人ひとりについて設けたプロフィールページです。新型コロナウイルスがまだまだ収束しきれない中、是非、近況報告など書き込みをお願いしま

す。読み手も書き手も楽しくなること、請合いです。

閲覧・書き込みに必要なパスワードはトップページの「問い合わせ」バナーから照会ください。（連絡先は「学年一口アンテナ連絡先」を参照）

阿部 隆之輔

【昭和54年卒】 学年のお知らせは、合志会サイト、メーリングリスト、Facebookいずれかをご覧ください。メールの不達が増えています。新規アドレスの登録を。

合志会サイト公開部分には修猷館関連情報を掲載。他学年のみなさまからの情報もお待ちしております。（連絡先は「学年一口アンテナ連絡先」を参照）

菊池 政道

【昭和58年卒】 来年（令和6年）は、昭和58年卒の大多数の皆さんが還暦を迎えます。イベント等を検討していますが、まずは連絡網の整備です。昭和58年卒のメーリングリストに未加入の方は、学年幹事の池上宛にお知らせをお願いします。（連絡先は「学年一口アンテナ連絡先」を参照）

学年幹事 池上 浩司

【平成2年卒】 3年間続いたコロナ禍もようやく出口が見え始めてきました。同窓生が心置きなく集い、お互いの無事と再会を喜べる日は、もうそこまで来ています。

「まもなく、お待ちかねの同窓会がやってきます。体調万全でお待ちください」

三戸

【平成3年卒】 3年ぶりのリアル開催となった近畿修猷会総会には、たくさん館友の皆様（参加者108名、オンラインで15名）に参加いただきありがとうございました。私達讃猷会も50名集まり旧交を温めることができました。実行委員の皆さん、本当にお世話になりました。これからは、年3回（お盆、正月、福岡総会）学年で集まりたいと思っています。

常任幹事 松田 由理子

【平成5年卒】 GO猷会のみなさま、昨年は、同窓会福岡総会の幹事学年お疲れ様でした。3年ぶりのリアル開催、新型コロナの感染状況など不確定要素が多いなかで、無事に開催することができました。一時的に収束するなど運も良かったと思います。ご協力、誠にありがとうございました。次は、近畿修猷会ですね。みんな50歳になる年です。更に結束を固めて参りましょう。

常任幹事 能見 信二

【平成6年卒】 六星会の皆さま、いよいよ同窓会総会の幹事を務める卒業30年です。入江耕平実行委員長のもと、着々と準備が進んでいます。『六光星（ほし）に願いを、みんなに笑みを。』久々に会って、ちょっと笑えて、ささやかな幸せを感じる総会になればいいなと思っています。おそろいのTシャツを着て、みんなで総会を楽しみましょう！

党 智

【平成7年卒】 七猷会のみなさま、2024年の同窓会総会はいち七猷会が務めます。

先日古賀実行委員長のもとキックオフを行い、現在各部会長を選任して、一緒に準備を行ってくれるメンバーを組閣中です。

これからお声かけする予定の方もおりますので、是非ご協力をお願いいたします！

また、一緒に同窓会総会を盛り上げたい！つて方がおられましたら、是非ご連絡いただければ幸いです。（連絡先は「学年一口アンテナ連絡先」を参照）

皆さま、よろしくお願いいたします。

常任幹事 池下 智

【平成8年卒】 「同じ窓辺で学んだ仲間や先輩・後輩が会えること」「集う」ことがあらためて大事だと感じられる「東京修猷会総会」を2023年6月に開催予定です。是非お誘いあわせの上でご参加ください！

平成8年卒のみんな、久々に会えるのを楽しみにしています！当日の参加よろしく願います！総会の詳細は東京修猷会のWebサイトをご確認ください。

平八会（へいはちかい）東京修猷会総会実行委員長

大場 さおり

【平成10年卒】 今年は卒業後25周年だー！またみんなと集まる機会を企てるから楽しみに待っていてください！お手伝いもよろしく！何かあれば、メール・ラインください！連絡先がわからない方はクリニックに連絡ください！（連絡先は「学年一口アンテナ連絡先」を参照）

まめこと村上 弘

【平成12年卒】 2000年卒のみんな、お元気ですか？

卒業20年から早くも3年、そろそろ集まりましょう！

常任幹事 松尾 光泰

学校報告

創立記念講演

「メッセージー修猷館を卒業して40年、

後輩の皆さんに伝えたいこと」

ソニー株式会社 執行役員常務

河野 弘氏

(昭和56年卒)

5月26日、創立記念行事が行われた。

この創立記念行事は、天明4年（1784年）の創立から238年、長きにわたって受け継がれてきた本校の歴史を再確認し、未来へと繋ぐ意義深い行事である。

創立記念式典で、岡本圭吾館長は、創立以来の本校の歴史を振り返りながら、『世のため、人のため』の精神のもと、「不羈独立」「質朴剛健」「自由闊達」に象徴される校風、『踐脩厥猷』にはじまる『修猷の学び』など、多様性に富んだ『修猷文化』を継承し、修猷の歴史・伝統・文化について修猷生同士で語り合うことによって、今後も新たな『修猷文化』を創造し続けてほしいと語った。

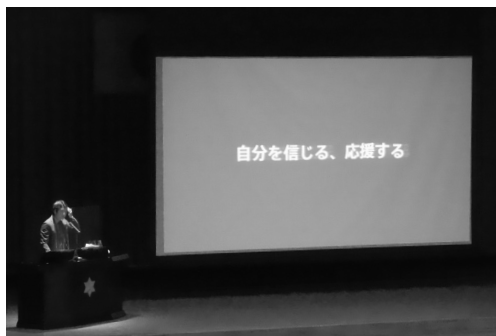
記念講演は、ソニー株式会社執行役員常務で本校昭和56年卒

の河野弘氏にお越しいただき、「メッセージー修猷館を卒業して40年、後輩の皆さんに伝えたいこと」と題してご講演をいただいた。

講演では、後輩たちへのメッセージとして「原動力ーモチベーションの力」、「行動力」、「価値観の力」の『3つの力に支えられて』をテーマにご自身の経歴や経験談について、会社のスタッフの方が描かれたという漫画を用いて振り返られた。

「原動力ーモチベーションの力」では、周囲から無理だと言われるような状況でも、それに負けない位のパッションをもち、いかに自分を信じられるかどうかで何かを成し遂げることができるといふことを大学進学のエピソードに絡めてお話しいただいた。また、P D C Aサイクルを行う時には『B』の段階では悩んでいるが、『C』の段階では悩まずに突き進むことが大事だといふことを覚えておいてほしいとのことだった。

「行動力」では、「やってみる、試してみる」という一歩踏み出す力が大事であることと、そのためには目標やモチベーションの置き方が重要なポイントであることをお話し



いただいた。ソニー株式会社へ入社し、27歳の頃、東欧の新規ビジネスを任された時には思い通りにいかないことも多々あり、自分を追い詰めることもあったが、「すべて順調にいくことなどあり得ないだろう」と考えるようにし、上手いかない時は自分で自分を励ましたり褒めたりすることによって自然と物事が上手くまわっていくようになったという経験を語られた。

「価値観の力」では、価値観とは、そこにいる人達が創り上げていくものであり、今、修猷生が日々の生活の中で、いろいろな話をしたり、議論をしたりする中で形成されているものだから、修猷の先輩、後輩や友人との繋がりを大切にしてほしいと語った。

最後に、河野氏は後輩たちに向けて「今を大事に生きる、それが未来につながる」と熱いメッセージで講演を締めくくられた。

文化講演会「哲学と『生きる力』」

哲学者 立正大学教授

野矢茂樹氏

10月31日、生徒、そして職員一同が待ちに待った文化講演会が実施された。本校の文化講演会では、毎年各界で活躍されて

いる講師の方をお迎えして、生徒の知識欲をかきたてる講演を行っていた。今年には哲学者の野矢茂樹先生に「哲学と『生きる力』」というテーマのもと、約90分にわたり哲学そして生きることに語っていただいた。

講演は、私たちが生きていく上で陥りがちな「四つの罠」、すなわち「目標の罠」「成績の罠」「褒められることの罠」「自己肯定感の罠」を軸に展開された。全編を通して、常識と呼ばれていることについても自分の頭で考えようとする、足止めて立ち止まる力」の重要性を再認識することができた。

先生の青年時代のエピソードやご家族のこと、さらには旅、恋愛などについても、分かりやすく親しみを込めて語っていたが、何よりも、西洋哲学を探究されてきた先生から禅の精神とその実践を示していただくことができたのは極めて貴重な経験だった。講演の締めくくりは全員で行った「座禅の呼吸」であった。一同、2分間、静寂に包まれた講堂で、今日得たものを体に染み込ませる時間を共有することができた。

終了後の座談会でも、集まった生徒の質問の一つ一つに丁寧にご返答いただき、向学心にあふれる若者の心と脳に心地よい刺激を与えていただいた。鎌倉から福岡まではるばるお越しいただき、館生の目を開かせる講演をしていただいた野矢先生に感謝のことを申し上げたい。



令和四年 部活動

事業部 (4)

執行部・議長団・應援団・新聞部

文化部 (19)

文芸部・演劇部・映画制作部・物理部・化学部・生物研究部・数学研究部・写真部・コーラス部・吹奏楽部・美術部・書道部・ESS部・JRC部・華道部・茶道部・パソコン部・ディベート部・放送部

体育部 (16)

弓道部・剣道部・柔道部・水泳部・山岳部・陸上部・野球部・ソフトテニス部 (男子) (女子)・テニス部 (男子) (女子)・卓球部・バスケットボール部・バレーボール部 (男子) (女子)・ラグビー部・サッカー部・ヨット部・バドミントン部

総合部 (1)

文体総合部

現在40のクラブの下で現役生は元気に活動しています。各クラブ活動については修猷館HP「部活動紹介」をご覧ください。

修猷館生の活躍

〳〵全国大会優勝

令和4年3月20日東京の日本武道館で、第44回全国高等学校柔道選手権大会が開催され、柔道部の姥琳子が57kg級で見事「優勝」しました。その後、高校日本一と全日本ジュニア選手権大会第3位の実績を評価され、体重別日本一を決める名誉ある大会「講道館杯」に出場しました。



また、コロナ禍にあつて、どの部活動も健闘しました。なかでも、新聞・生物研究・書道・華道・ディベート・放送・柔道・陸上・山岳・文体総合〔囲碁〕が全国大会への出場を果たしています。

同窓会の歩み

一・一三 役員会・学年幹事会合同新年会

アークホテルロイヤル福岡天神（六十一名）

※宮崎修猷会（中止）

二・一四 菁莪発送

二四 修猷協会理事会

※鹿児島修猷会（中止）

※大分修猷会（中止）

三・四 同窓会入会式（久保田相談役・大賀幹事長・中本事務局長）

五 第75回卒業式（四三三名 男子二一五名 女子二一八名 津田会長・大賀幹事長・中本事務局長）

四・七 入学式（四四〇名 男子二一五名 女子二二五名 津田会長・大賀幹事長・中本事務局長 他一名）

八 令和三年度会計監査

五・一二 学年幹事会（令和三年度会計決算承認）

二八 修猷館創立記念講演・卒業生キャリアセミナー

二八 同窓会総会（ホテルオークラ福岡 約七〇〇名）

二九 OBゴルフ大会（福岡カンツリー倶楽部 和白コース 一二四名）

六・四 中京修猷会（総会・懇親会 大同特殊鋼健保会館 岡本館長・津田会長）

一〇 東京修猷会（総会のみ ハイアットリージェンシー東京 会場とオンラインで開催 岡本館長・津田会長・西高辻副会長・大賀幹事長）

二〇 修猷協会理事会・評議員会

七・一三（二） 生徒海外研修（アメリカ東海岸）

九・一〇 大運動会

一〇 ※中国四国修猷会（中止）

一一・五 近畿修猷会（総会・懇親会 ヴィアーレ大阪会場とオンラインで開催 岡本館長・津田会長・大賀幹事長）

一一 北九州修猷会（THE STEEL HOUSE 岡本館長・西高辻副会長・中本事務局長）

一二 東北修猷会（仙台ガーデンパレス 岡本館長・大賀幹事長）

一九 沖縄修猷会（おもろ殿内那覇 眞鍋教諭・大賀幹事長）

二四 応援歌伝承会（同窓生一二名参加）

二六 熊本修猷会（アークホテル熊本城前 岡本館長・西高辻副会長・大賀幹事長）

一一・一〇 長崎修猷会（新和楼 岡本館長・大賀幹事長）

毎月第2木曜日役員会（5月・8月・12月・1月を除く）

令和4年2月は書面開催

名簿管理・菁莪編集・ホームページ運営・歴史伝統伝承・資料館運営 各委員会 適宜開催

役員会・学年幹事会報告

二月十日（役員会 書面開催）

(1) 学校から 雑誌「修猷」が完成

今後の予定について

(2) 各種委員会から

・ 資料館運営委員会 展示ケース増設企画について 提案

・ 名簿管理委員会 名簿システム改変について

・ 菁莪編集委員会 「菁莪」発送

(3) 令和4年度同窓会総会について

(4) 常任幹事の交代について

(5) その他

・ 役員会 ・ 学年幹事会合同新年会報告

・ 支部総会について

※瀬戸選手（H30年卒）の支援について

三月十日（役員会）

(1) 学校から

(2) 同窓会入会式について 3月4日（金）

(3) 卒業式について 3月5日（土） 津田会長他2名出席

(4) 各種委員会から

・ ホームページ運営委員会 サーバーの引越しについて

(5) 修猷協会理事会報告

・ 資金の運用について

審議事項

(1) 令和4年度委員会予算について

・ 名簿管理委員会

・ 資料館運営委員会

(2) 令和4年度同窓会総会について

ホテル会場にて立食・一部着座での開催を予定

(3) 令和5年同窓会総会日程について

令和5年5月26日（金） ホテルニューオータニ博多

幹事学年・平成6年卒六星会

その他

・ 館歌歌詞について

四月十四日（役員会）

(1) 学校から 管理職の紹介

入学式報告

入試結果について

部活動報告

(2) 修猷館高校転退職職員への餞別・全国大会出場のお祝いについて

(3) 令和4年度同窓会総会について

審議事項

(1) 令和4年度学年幹事会について

その他

・ 瀬戸選手への支援金について

五月十二日（学年幹事会）

議事

- (1) 令和3年度事業報告及び収支決算書（案）
- (2) 会計監査報告並びに決算承認の件
- (3) 令和4年度事業計画及び予算（案）審議並びに承認の件
- (4) 役員交代の件
その他
- (1) 館歌歌詞について
- (2) 新役員紹介
- (3) 瀬戸勇次郎選手の支援について
- (4) 同窓会総会について
- (5) 修猷協会について

六月九日（役員会）

・「小川洋さんを偲ぶ会」について説明

S43年卒有志の会

- (1) 学校から 学校生活・部活動について
- (2) 学年幹事会報告
- (3) 同窓会総会報告 開催の報告とお礼
- (4) 支部総会報告 中京
- (5) 各種委員会から
・資料館運営委員会
審議事項
- (1) 常任幹事交代について

七月十四日（役員会）

- (1) 学校から アメリカ研修について

- (2) 支部総会報告

東京 6月10日（金）会場とオンラインで開催 岡本館長、

津田会長、西高辻副会長、大賀幹事長が参加

- (3) 修猷協会理事会評議員会報告
- (4) 各種委員会から
・菁莪編集委員会
・ホームページ運営委員会
・歴史伝統伝承委員会
・資料館運営委員会
- (5) その他 令和4年度同窓会総会報告 平成5年卒GO猷会実
行委員長より

九月八日（役員会）

- (1) 学校から アメリカ研修報告（生徒2名）
運動会について

部活動報告 全国大会出場について

- (2) 総会幹事学年引き継ぎについて 平成5年卒GO猷会から平成6年卒六星会へ

- (3) 各種委員会から
・名簿管理委員会
・ホームページ運営委員会
(4) その他
・小川洋さんを偲ぶ会 報告

審議事項

(1) 資料館の資料の燻蒸、展示替えについて

その他

・支部総会について

十月十三日（役員会）

(1) 学校から 運動会について 3年ぶりに従来通り実施

(2) 全国大会出場お祝いについて

(3) 各種委員会から

・菁莪編集委員会

・ホームページ運営委員会

・資料館運営委員会

十一月十日（役員会）

(1) 学校から アメリカ研修の報告書を配布

・部活動の活躍について

・修猷フェスト（中学生のためのオープンスクール）を開催

(2) 支部総会について

・近畿 11月5日（土）会場とオンラインで開催

各支部総会の予定

・北九州 11月11日（金）

・東北 11月12日（土）

・沖縄 11月19日（土）

・熊本 11月26日（土）

・長崎 12月10日（土）

・宮崎 1月28日（土）

・鹿児島 2月4日（土）

・大分 2月18日（土）

(3) 各種委員会から

・菁莪編集委員会 学年一口アンテナの寄稿依頼

審議事項

(1) 令和5年度同窓会総会・懇親会の内容について

・ホテルでのリアル開催の実施について

(2) 令和6年度同窓会総会・懇親会の日程と会場について

日程…令和6年5月25日（土）

会場…ホテルニューオータニ博多

幹事学年…平成7年卒七猷会

その他

・役員会・学年幹事会合同新年会の開催について

1月13日 KKRホテル博多にて開催の予定

令和3年度 同窓会会費入金状況

令和3.4.1～令和4.3.31

卒 年	済	人員	終身会費	人員	年会費	卒 年	済	人員	終身会費	人員	年会費
昭 13	76	0	0	0	0	59	413	0	0	0	0
14	85	0	0	0	0	60	381	2	40,000	0	0
15	93	0	0	0	0	61	394	0	0	0	0
16	121	0	0	0	0	62	394	1	20,000	1	2,000
17	142	0	0	0	0	63	424	0	0	0	0
18	159	0	0	0	0	平 1	370	1	20,000	0	0
19	126	0	0	0	0	2	405	0	0	0	0
20 (5)	131	0	0	0	0	3	425	1	20,000	0	0
20 (4)	124	0	0	0	0	4	440	0	0	1	2,000
21・22	156	0	0	0	0	5	396	0	0	0	0
23・24	241	0	0	0	0	6	436	0	0	0	0
25	194	0	0	0	0	7	449	0	0	0	0
26	208	0	0	0	0	8	484	0	0	0	0
27	268	0	0	0	0	9	438	0	0	0	0
28	269	0	0	0	0	10	429	0	0	0	0
29	247	0	0	0	0	11	432	0	0	0	0
30	253	0	0	0	0	12	394	0	0	0	0
31	243	0	0	0	0	13	389	0	0	0	0
32	262	1	20,000	0	0	14	396	0	0	0	0
33	279	0	0	0	0	15	397	1	20,000	0	0
34	264	0	0	0	0	16	402	0	0	0	0
35	261	0	0	7	14,000	17	398	0	0	0	0
36	275	0	0	4	8,000	18	397	0	0	0	0
37	248	0	0	11	22,000	19	390	0	0	0	0
38	236	1	20,000	5	10,000	20	390	0	0	0	0
39	198	1	20,000	9	18,000	21	390	0	0	0	0
40	269	0	0	5	10,000	22	390	0	0	0	0
41	329	2	40,000	6	12,000	23	397	0	0	0	0
42	305	3	60,000	10	20,000	24	393	0	0	0	0
43	330	1	20,000	4	8,000	25	435	0	0	0	0
44	295	3	60,000	5	10,000	26	402	0	0	0	0
45	310	2	40,000	8	16,000	27	399	0	0	0	0
46	270	1	20,000	2	4,000	28	433	0	0	0	0
47	289	1	20,000	4	8,000	29	433	0	0	0	0
48	246	2	40,000	2	4,000	30	398	0	0	0	0
49	283	1	20,000	6	12,000	31	427	0	0	0	0
50	289	1	20,000	7	14,000	令 2	436	0	0	0	0
51	310	3	60,000	4	8,000	3	392	0	0	0	0
52	243	2	40,000	4	8,000	合 計	25,967	42	840,000	116	232,000
53	221	1	20,000	0	0	卒 業 生 会 費 計			1,072,000		
54	240	4	80,000	2	4,000	通 信					44,000
55	242	1	20,000	2	4,000	定 時					30,000
56	259	3	60,000	4	8,000	卒業生終身会費年会費合計					1,146,000
57	238	1	20,000	2	4,000	令 4 年 卒 業 生 終 身 会 費				433	8,660,000
58	252	1	20,000	1	2,000	總 合 計			9,806,000		

修猷館同窓会会則

第1章 総 則

第1条 本会は修猷館同窓会と称する。

第2条 本会は事務局を福岡市早良区西新3-12-14：修猷館同窓会館内に置く。

第3条 本会は会員相互の親睦を深め、母校の発展に寄与することを目的とし、次の事業を行う。

- 1) 会員名簿の発行
- 2) 同窓会誌「菁莪」の発行
- 3) 創立記念事業
- 4) その他必要な事業

第4条 本会は次の会員によって組織する。

- 1) 通常会員
 - イ) 福岡県立中学修猷館卒業生
福岡県中学修猷館卒業生
 - ロ) 福岡県立高等学校修猷館卒業生
福岡県立修猷館高等学校卒業生
 - ハ) 上記の学校に在籍した者で入会を希望する者
 - ニ) 福岡県立修猷館高等学校定時制卒業生
 - ホ) 福岡県立修猷館高等学校通信制卒業生
- 2) 特別会員
上記学校の教職員および旧教職員
- 3) 準会員
福岡県立修猷館高等学校在校生

第2章 役 員

第5条 本会に次の役員を置く。

会 長	1 名	副 会 長	若干名	名誉会長	1 名
常任幹事長	1 名	事務局長	1 名	監 事	2 名
常任幹事	全日制各年次	1 名 (40名以内)			
定時制・通信制	若干名				
相 談 役	1 名	顧 問	若干名		

第6条 本会役員の選任は次のとおりとする。

- 1) 会長・副会長および監事は通常会員中より役員会において選出し、学年幹事会の承認を得る。
- 2) 名誉会長は母校館長とする。
- 3) 常任幹事は、原則として卒業後17～56年次および定時制・通信制会員より選出し、学年幹事会の承認を得る。
- 4) 常任幹事長は常任幹事中より会長が委嘱する。
- 5) 上記以外の役員は通常会員中より会長が委嘱する。

第7条 役員は次の任にあたる。

- 1) 会長は本会を代表し、会務を総括する。
- 2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時はその代理をする。
- 3) 常任幹事長は会長の意を受け、円滑な会務の運営にあたる。
- 4) 事務局長は金銭の収支、会費の徴収、議事録の作成その他本会事務一般にあたる。
- 5) 監事は会計事務を監査する。
- 6) 常任幹事は本会の会務を執行処理する。
- 7) 名誉会長、相談役および顧問は本会の諮問に応じる。

第8条 本会役員の任期は2年とする。ただし、重任を妨げない。

第3章 学年幹事

第9条 学年幹事は全日制各年次3名以内（定時制・通信制は若干名）を選任し、本会に報告する。

第10条 学年幹事は学年幹事会を構成し、その付託事項を処理する。

第4章 会 議

第11条 総会

定期総会は原則として毎年5月30日（母校創立記念日）に会長が招集し、役員の選任・予算・決算・規約改正およびその他の会務報告を行う。

2. 臨時総会は会長が必要と認めた場合、会長が招集する。

第12条 学年幹事会

学年幹事会は学年幹事をもって組織し、役員の選任・予算・決算・規約改正、その他会務執行に必要な重要事項を審議決定する。

2. 定期学年幹事会は原則として毎年5月の第2木曜日に会長が招集する。

3. 臨時学年幹事会は会長が必要と認めた場合、会長が招集する。

4. 学年幹事会の議決は出席者の過半数によってこれを決する。

第13条 役員会

役員会は役員をもって組織し、予算・決算・規約改正案の作成および会務執行に必要な事項を審議し処理する。

2. 会長は随時必要ときにこれを招集し、議長となる。

3. 役員会の議決は出席者の過半数によってこれを決する。

第5章 組 織

第14条 委員会

本会は会務執行にあたり、必要な場合に委員会を設置することができる。

第15条 事務局

本会に事務局を置き、事務局長1名、事務局次長1名および事務職員若干名をおくものとする。

第16条 支部

本会は遠隔地の会員との連絡を密にするため、必要な地に支部を置くことができる。

2. 支部の結成は代表者の申し出により、役員会の承認を受ける。

3. 支部の運営は各支部の定めるところとする。

第6章 会計および庶務

第17条 本会の経費は会費および寄付金および運用収入をもって充てる。

第18条 本会の会費は終身会費20,000円、年会費2,000円および特別会費とする。

第19条 本会の会計年度は4月1日より翌年3月31日とする。

第20条 本会は一般財団法人修猷協会の運営管理に關しての権利は相応に保有するものとする。

第7章 補 則

第21条 本会会務の処理に必要な細則は別に定める。

第22条 本会則は昭和43年5月30日より施行する。

昭和49年5月30日一部改正。

昭和53年5月30日一部改正。

昭和55年5月30日一部改正。

昭和59年5月30日一部改正。

平成21年5月30日一部改正。

平成27年5月30日一部改正。

令和3年度 一般財団法人修猷協会活動報告

(令和3年4月1日～令和4年3月31日)

【修猷協会とは？】

修猷館高校の教育の充実向上を助成し、将来社会に貢献できる人材を育成・輩出することを目的に設立され、同窓会、学校、PTAが協力して運営している法人です。具体的には生徒の海外研修旅行への助成や生徒の学校活動・教育環境整備に関する助成を行っています。

1. 令和3年度事業報告（公益目的支出実施報告）

- (1) 海外研修旅行への助成 助成額：0円（コロナ禍で中止）
- (2) 生徒の学校活動・教育環境整備に関する助成 助成額計：1,000万円
 - ①文化祭活動 30万円 ②運動会活動 200万円 ③部活動遠征費 150万円
 - ④文化講演会 30万円 ⑤十里踏破遠足 150万円（バス借り上げ費用）
 - ⑥施設設備・備品等の整備 440万円

2. 資産・収支の概要

令和4年3月末の資産合計は約8億3千万円であり、そのうち同窓会館の土地建物、学校グラウンド人工芝などの資産を差し引いた約3億円が助成事業の原資となります。

令和3年度の収支は、同窓会館1階部分のローソンへの賃貸や駐車場による収入、金融資産の運用益など合計で約3千万円の収入、上記助成額1千万円を含んだキャッシュベースの費用は約2千万円であり、収支的にはキャッシュフローで1千万円の黒字となりました。

3. 役員（理事・監事）及び評議員の状況

- (1) 理事10名（同窓会6名、学校2名、PTA2名）
 - ・同窓会：津田純嗣（S44）大賀啓史（S46）田中雅美（S50）上田英友（S55）
中本純徳（S61）大野慶樹（S63）
 - ・学校：館長、事務長 ・PTA：会長、副会長
- (2) 監事2名（同窓会2名）菊池武彦（S49）石田淳子（S58）
- (3) 評議員12名（同窓会6名、学校2名、PTA4名）
 - ・同窓会：久保田勇夫（S36）松本正隆（S43）西高辻信良（S47）谷川浩道（S47）
福泉忠興（S59）三戸宗一郎（H2）
 - ・学校：副校長、教頭 ・PTA：副会長2名、他2名

4. 今後の課題

現在の資産状況を考えれば学校への定例的な助成について不安はありませんが、将来的な同窓会館の建て替え、資料館の大規模整備、グラウンド人工芝の張替えなどの大型案件に対応できない可能性が高く、新しい資金確保の方法は今後の検討課題です。また修猷協会の活動への理解、支援の輪を同窓生全体に広げる広報活動も重要だと考えています。

WISH UPON THE STAR
SMILE FOR ALL
323
令和5年度

修猷館同窓会総会

六^ほ光^し星に願いを、みんなに笑みを。

とき 2023年5月26日(金)18:00～

ところ ホテルニューオータニ博多

チケット 前売 8,000 円 当日 9,000 円 令和5年卒 2,000 円

令和5年度同窓会総会の幹事学年を務めさせていただく平成6年卒六星会です。

長引くコロナ禍やウクライナ戦争など、厳しい環境の中で持続可能な社会の在り方への模索が続いています。その状況下において幹事学年を担うにあたり、やはり人と人が直接会って交流するということに、何物にも代え難い尊さや価値を見出しました。いままで当たり前にできていたことが困難になりつつある今だからこそ、平和や日常のささやかな幸せを感じられるような場にしたいと考え、『六光星（ほし）に願いを、みんなに笑みを。』というテーマのもと、同窓会総会を開催させていただきます。

館友のみなさまが笑顔で集い、語り合える場になるよう努めてまいります。

ぜひ、みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

※コロナ感染防止対策へのご協力にご理解いただきますよう、お願い申し上げます。



総会幹事 平成6年卒六星会 実行委員長 入江耕平

OB ゴルフ大会

とき 2023年5月28日(日)

ところ 福岡カンツリー倶楽部 和白コース

チケット・グッズは

六星会 WEB ショップでも

お買い求めいただけます。



チケットのお問合せ先 070-9070-8157



修猷館同窓会誌

菁 莪

発行者 修猷館同窓会

福岡市早良区西新三丁目十二番十四
電 話 (〇九二) 八二二—〇六六三
F A X (〇九二) 八二二—〇六七二

代表者 津田 純嗣

発行日 令和五年一月三十一日

編集者 菁莪編集委員会

森下七百枝・鞍垣 吉政
小柳 有美・堤 勝也
弥吉 祐子・石橋 顕
能見 信二・田中 健吾
村上 弘・田元 有紀

印刷 祥文社印刷株式会社